

第Ⅴ章 総括

1. はじめに

蒲生・上の原遺跡の調査では、縄文時代早期・後期・晩期、そして弥生時代後期に属する遺構や遺物が出土した。その結果、これまで見てきたような事実が判明した。それは、菊池川流域に展開した古い各時代の歴史を知る上での重要な素材となるであろう。しかし、単に、発掘の事実だけを披露しただけでは、何等の史料にもなりえない。そこで、次には、下に挙げる視点を以て、これまで報告してきた発掘資料の史料化を図るための、様々な試みをここでやりたいと思う。その視点とは、次に記すものである。

- ① 縄文時代早期土器群の編年学的研究
- ② 縄文時代早期の人びとの生活実態
- ③ 弥生時代後期土器群の編年学的研究
- ④ 弥生時代後期の集落景観
- ⑤ 弥生時代後期の社会と鉄器

これより、以上の視点の順に従って、その思うところを述べていくことにしよう。

2. 縄文時代早期土器群の編年学的研究

—中原式土器の設定—

①蒲生・上の原遺跡の早期土器群

蒲生・上の原遺跡では、縄文時代早期に属する土器群が出土した。その種類は、円筒形条痕文土器、無文土器、撚糸文土器、瘤付きの無文土器、そして、押型文土器であった。ここでは、こうした土器群について、型式学的検討を行い、その編年的な問題を整理することを主題とする。また併せて、編年学的研究の立ち遅れが目立つ中九州西部地域の縄文時代早期研究に、何らかの材料を提供することを意図している。

上記したように、本遺跡では、包含層や弥生時代の遺構の中から、円筒形条痕文土器、無文土器、撚糸文土器、瘤付きの無文土器、押型文土器が出土した。そこで、まず、それぞれの土器について見てみよう。

円筒形条痕文土器は、本遺跡の土器の中で、一番

まとまって出土している。この土器は、円筒形を呈する平底の厚手の土器である。古く、東光彦・富田紘一両氏（1969）は、「カブト山、小関原でみられる条痕文土器は、厚手、深鉢形、平底（？）で、土器上半に横走平行貝殻条痕文を付し、下半を無文に置き、篋磨きし、土器内面もよく研磨された、特徴あるもの」と注目した。その後、緒方勉氏は、益城町櫛島遺跡の報告（1975）の中で資料提示をおこない、高木正文氏（1977）は、若干の型式学的検討を加えた。ただし、この種類の土器が器形や文様の特徴で呼ばれることには、何らの変化もない。まさに、中九州西部地域における早期土器群の編年学的研究の立ち遅れを象徴した存在でもある。

無文土器は、すべて胴部の破片であった。したがって、これが無文土器なのか有文土器の無文部なのかははっきりとはできなかった。ただし、先に紹介した円筒形条痕文土器とは、器壁の厚さの点で分別が可能である。

撚糸文土器は、1点が出土した。これは、未だに編年の位置が定かでない土器である。ただし、円筒形条痕文土器の条痕文施文の文様帯部分に撚糸文が施文されるなど、円筒形条痕文土器との関係が深い。また、押型文土器と併用されて施文される土器もあるなど、押型文土器との関係も深い。

瘤付きの土器は、無文土器である。口縁部に、幾つかの単位で瘤状の隆起部が付けられている。大分県での調査で、押型文系土器群の古手の土器である稲荷山式土器の時期であることが明らかとなっている（橋1982）。なお、無文土器としたものは、この土器の一部である可能性も高いが、個体識別では、それぞれは別個体である。

押型文土器では、帯状施文が特徴の川原田式土器、稲荷山式土器、そして早水台式土器が出土している。これらは、賀川光夫氏や橋昌信氏等、大分県の実験者によって、押型文系土器群の中でも古手の型式に相当することが明らかにされている（賀川1967・橋1984・坂本1995ほか）。

②蒲生・上の原遺跡早期土器群の編年の位置

ある一つの遺跡で出土した土器群について、その編年の位置を知ろうとする場合、次のような手順を踏む必要がある。まず第一に、出土した土器の中で時期的な問題が確定しているものを取り上げること。そして、次には、他の土器群とそれらとの共伴や類縁関係を参考にすること。その結果、その遺跡で出土した土器群に、編年の位置が与えられるのである。そこで、こうした視点を持って、蒲生・上の原遺跡出土の土器群を整理していこう。

蒲生・上の原遺跡で出土した早期土器群の中には、前記しているように、円筒形条痕文土器、無文土器、撚糸文土器、瘤付きの無文土器、川原田式土器・稲荷山式土器・早水台式土器などの押型文土器があった。この中で、時期的な問題がある程度確定しているものは、瘤付きの無文土器や各型式の押型文系土器群である。

さて、中九州東部地域（大分県）での早期土器群の研究は、押型文系土器群の編年学的研究が中心となって推進されてきた。その結果、「(中原段階)→川原田式土器→稲荷山式土器→早水台式土器→下菅生B式土器→田村式土器→ヤトコロ式土器→手向山式土器」(賀川1967・後藤1981・橘1984・坂本1995ほか)という型式土器の編年序列が明らかにされてきた。私は、こうした研究成果を踏まえて、中九州西部地域（熊本県）の押型文系土器群を、「稲荷山式土器→早水台式土器→下菅生B式土器→沈目式土器→石清水式土器」と整理した。

こうした成果を基にして、蒲生・上の原遺跡の押型文土器を考えてみよう。そうすれば、川原田式土器・稲荷山式土器・早水台式土器が見られるなど、押型文系土器群の前半期に位置付けられることが分かる。さらに、前記したように、瘤付きの無文土器が稲荷山式土器の段階に位置付けられることも明らかで、これも押型文系土器群の前半期である。

このように、蒲生・上の原遺跡の早期土器群の一部の土器は、明らかに押型文系土器群の前半期に編年される。

では、円筒形条痕文土器・無文土器・撚糸文土器と、上記した押型文系土器群の前半期に位置付けら

れる土器との関係は、どうであろうか。

これまでの調査によって発見された早期土器群の中で、円筒形条痕文土器に似た器形をして、その文様帯に横位施文の撚糸文を付す土器(緒方1975)がある。熊本県菊水町諏訪原遺跡が、その土器を出土した遺跡である。これは、撚糸文土器と円筒形条痕文土器との文様置換の好例である。つまり、この二つの土器には、類縁性が認められるのである。

また、同様のことが、円筒形条痕文土器と押型文土器との間でも言える。例えば、鹿児島県牟田尻遺跡や熊本県熊本市庵ノ前遺跡などは、その代表例であるが、他にも多くの出土例が見られる。円筒形条痕文土器と押型文土器には、類縁性がある。

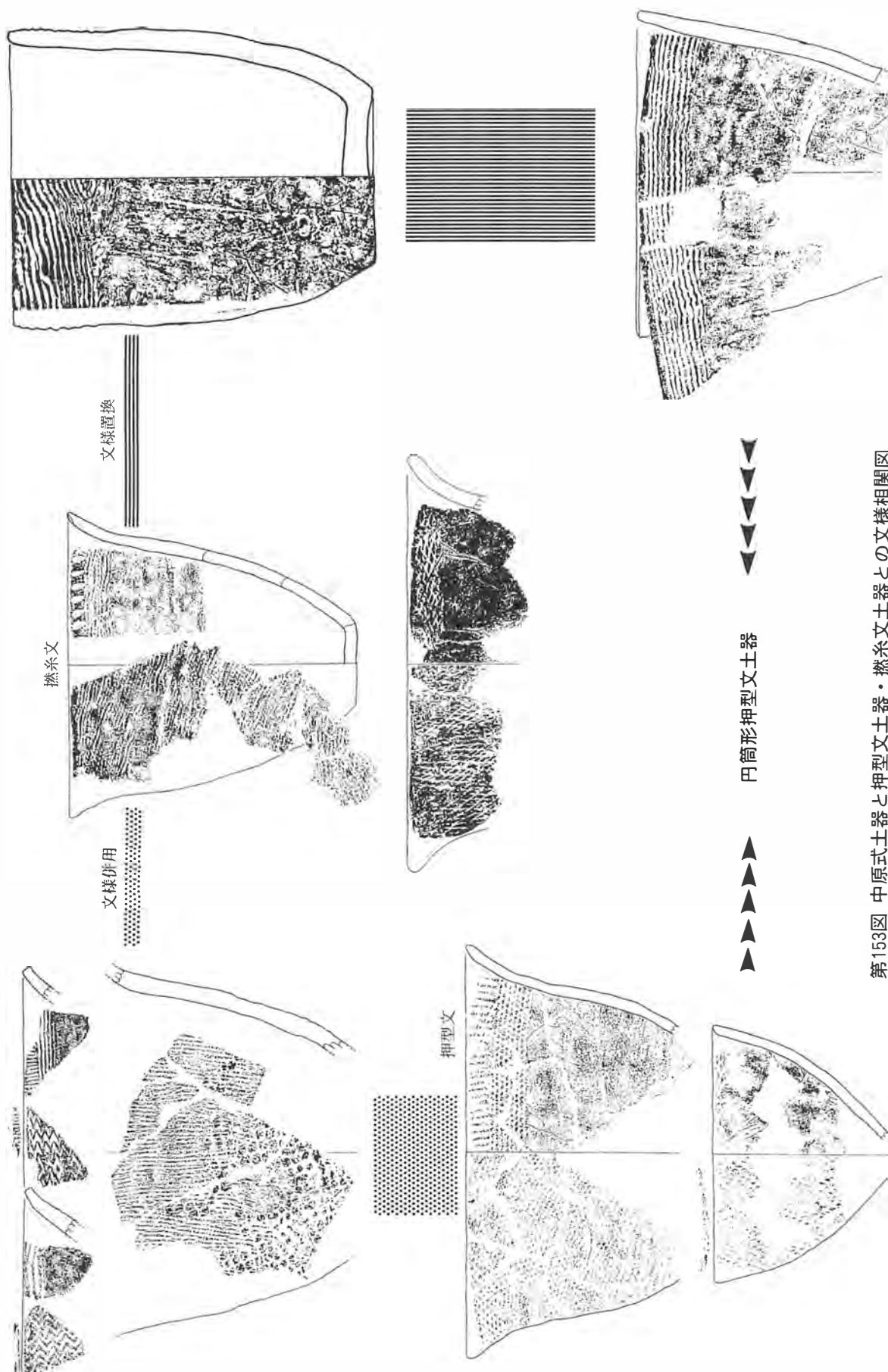
一方、撚糸文土器と押型文土器の間でも、同様の現象が見られる。それは、前記してもいるが、撚糸文と押型文とが同じ土器の中で併用されている例が認められることである。主な遺跡としては、大津町瀬田裏遺跡(緒方1992)、中後迫遺跡(松村ほか1978)、大津町～旭志村無田原遺跡(木崎1995)がある。これは、文様の併用という意味で、同時性や類縁性を十分に認識させる現象である。つまり、結局のところ、円筒形条痕文土器と押型文土器には、撚糸文土器とを介して、同時性や類縁性が認められるのである(第153図)。

ここに、蒲生・上の原遺跡で出土した土器群の中で、円筒形条痕文土器・撚糸文土器・瘤付きの無文土器・押型文土器には、同時性や類縁性が認められることが分かった。つまり、これらは、押型文系土器群の前半期という枠の中で考えれば、一括遺物に近い取り扱いが可能であるということである。換言すれば、蒲生・上の原遺跡の早期土器群は、押型文系土器群の前半期という、縄文時代早期の前葉ごろに編年の位置がある、ということになる。

③円筒形条痕文土器と型式—中原式土器の設定—

蒲生・上の原遺跡の早期土器群の時期的な位置を明らかにした今、広く、円筒形条痕文土器の型式学的研究をおこなうことにしよう。

円筒形条痕文土器の型式的特点を、今一度、見てみよう。円筒形を呈する器形の、平底で厚手の土器である。文様帯は、口縁部以下の胴部の一部にあり、



第153図 中原式土器と押型文土器・燃系文土器との文様相関図

それ以下と内面は無文となり、ていねいに撫でられている。文様は、貝殻腹縁によって施文され、その手法の違いによって、連続刺突文・押引文・条線文という種類がある。

また、こうした貝殻による文様の代わりに、撚糸文や絡条体圧痕文、そして押型文が見られる場合もある。この場合には、撚糸文や絡条体圧痕文がある土器には、口縁部周辺に文様帯が限られるという施文原理は生きている。しかし、押型文を施す土器になると、その原理が崩れて、全面施文となる。

次に、時期の問題であるが、縄文時代早期前半期に位置付けられる押型文系土器群の前後の時期に求められるだろう。これについては、前の項でも指摘したように、押型文土器や撚糸文土器との文様置換例や併用例から導き出せる結論である。

この土器の分布では、九州内での具体的な遺跡分布の提示はできない。ただし、概観的な言及は可能である。それによると、中九州西部地域は、60箇所以上の遺跡で確認されているなど、その分布の中心地域のようなのである。それに対して、長崎県・佐賀県・福岡県などの北九州や鹿児島県・宮崎県では、類例が認められるが、中九州西部地域ほどの状況ではない。また中九州東部地域でも、それほど類例が多くない。このように、その分布は、中九州西部を中心とした地域であると言える。

以上の特徴を踏まえた上で、私は、中九州西部地域における縄文時代早期前葉の土器型式として、「中原式土器」を設定したいと思う(1995)。その標式遺跡は、菊水町中原西原遺跡である。そして、それは、高木正文氏によって初めて整理されたという学史(1977)を尊重する立場からの命名である。

④中原式土器の細分とその変遷

中原式土器を設定した今、今度は、これまで確認されている資料を使っての型式学的研究を通して、中原式土器を細分し、その展開を考えよう。そこで、中九州では、そうした研究に耐えうるだけの資料的な蓄積があるので、そうした資料の検討から始めたい。

型式的特徴の一つとして、私は、貝殻腹縁によって施文される文様と、その手法の違いによる種類、

連続刺突文・押引文・条線文を挙げた。この中で、文様の種類とその施文部位は、それぞれに型式的展開を予想させてくれるものである。そこで、仮に、連続刺突文の土器を第1類と第2類、押引文の土器を第3類、条線文の土器を第3類と第4類と呼ぶことにしよう。

第1類の土器(第154図) 貝殻腹縁による連続刺突文が、口縁部近くの狭い範囲に施文される土器を第1類の土器と呼ぶ。

この土器が出土している遺跡には、人吉市村山間谷遺跡(鶴嶋・和田1988)がある。

この土器には、二つの狭い文様帯がある。それは、口唇部の文様帯と口縁部の文様帯である。いずれの文様帯にも、貝殻腹縁による連続刺突文が施される。つまり、二段に施文される連続刺突文があるということである。これは、この種の土器の編年的位置を知る上での重要な要素である。

第2類の土器(第154図) 貝殻腹縁による連続刺突文が、口縁部から胴部上位に施文される土器を第2類の土器と呼ぶ。

この土器が出土している遺跡には、大津町瀬田裏遺跡、西原村襟ノ平遺跡(高木1977)、人吉市村山間谷遺跡(鶴嶋・和田1988)、山江村狸谷遺跡(木崎・隈1987)、相良村深水谷川遺跡(坂田1994)、本渡市丸尾ヶ丘遺跡(高木1977)等がある。

この土器には、二種がある。一つは単一の文様帯の土器で、もう一つは二つの文様帯からなる土器である。この中で、二つの文様帯を持つ土器では、口唇部と口縁部から胴部上位にかけてという、二つの部位に文様がみられる。いずれの文様帯にも、貝殻腹縁による連続刺突文が施される。

第3類の土器(第154図) 貝殻腹縁による押引文が、口縁部から胴部上位に施される土器を第3類の土器と呼ぶ。

この文様は、貝殻を押し引く際に、微妙にその位置がずれることにより、山形押型文のような痕跡となるものと、条線状になるものとがある。文様帯は、基本的に単一であるが、貝殻腹縁による押引文を口唇部に施す例もみられる。

この土器が出土している主な遺跡としては、山鹿

市～鹿本町蒲生・上の原遺跡，大津町瀬田裏遺跡，西原村秋田原遺跡（高木1977），益城町櫛島遺跡（緒方1975），御船町久保遺跡（高木1975），人吉市村山閤谷遺跡，山江村狸谷遺跡，同村大丸・藤ノ迫遺跡（木崎・隈・中原1986）等がある。

第4類の土器（第154図） 貝殻腹縁による条線文が施される土器を第4類の土器と呼ぶ。文様帯の範囲は，口縁部から胴部上位に限られている。

文様は，貝殻腹縁を滑らせるようにして付けられる条痕状のものである。文様帯は，基本的に単一であるが，貝殻腹縁による押引文を口唇部に施す例もみられる。

この土器が出土している主な遺跡としては，菊水町中原西原遺跡，山鹿市～鹿本町蒲生・上の原遺跡，植木町富応遺跡（富田・東1969），熊本市カブト山遺跡，益城町櫛島遺跡，御船町久保遺跡，同町干無田遺跡（緒方1970），人吉市村山閤谷遺跡，山江村狸谷遺跡，同村大丸・藤ノ迫遺跡がある。

第5類の土器（第154図） 胴部器面の広い範囲に貝殻腹縁による条線文が施文される土器を第5類の土器と呼ぶ。文様帯の範囲は，口縁部から胴部中位，さらには下位近くにまで見られる。

文様は，貝殻腹縁を滑らせるようにして付けられた条痕状のもので，縦施文と横施文とが複合されている。

この土器が出土している主な遺跡としては，菊水町中原西原遺跡，熊本市カブト山遺跡，御船町久保遺跡，城南町尾窪遺跡（高木・江本1973），山江村城・馬場遺跡（太田・松舟1990），相良村深水・谷川遺跡，人吉市白鳥平A遺跡（宮坂1993），同市白鳥平B遺跡（宮坂1994）がある。

ところで，この第1類～第5類土器の文様には，貝殻腹縁による器面上の移動において，技法上の変遷が捉えられそうである。そこで，それを施文運動という観点から箇条書きして，換言してみよう。

1. 一つの刺突運動が痕跡の単位として独立するもの（第1・2類）
2. 押引運動が連続して運用されるために，運動の痕跡の一つ一つの単位が独立しないもの（第3類）
3. 運動が連続して行われずに恒常的に運用され

るために，運動の痕跡の単位が存在しないもの（第4・5類）

そうすれば，施文運動は，1から2，そして3へ，ないしは，3から2，そして1へと遷移することがわかる。これを類として表現し，二つの変遷の可能性を示せば，次の通りとなる。

1. 第1・2類→第3類→第4・5類

2. 第5・4類→第3類→第2・1類

さらに，第1類と第2類や第4類と第5類との関係，文様帯の拡大化ないし狭窄化と捉えれば，

1. 第1類－（拡大化）→第2類→第3類→第4類－（拡大化）→第5類

2. 第5類－（狭窄化）→第4類→第3類→第2類－（狭窄化）→第1類

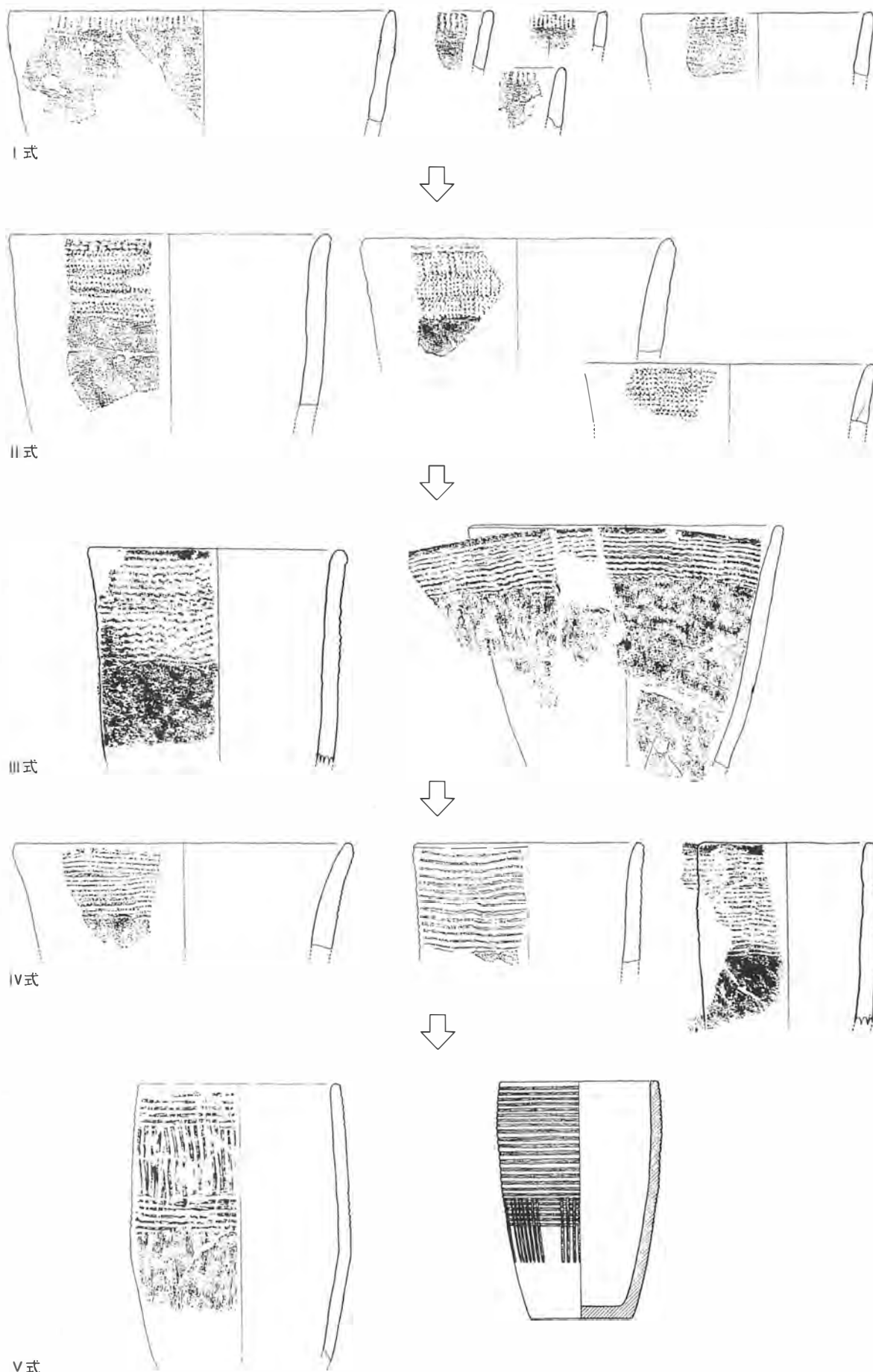
という二つの変遷が捉えられよう。

では，この二つの変遷の可能性の，どれが妥当であろうか。それぞれの類型土器の文様の特徴や同伴遺物について見てみよう。

まず，文様である。第1類の土器は，口唇部と口縁部の貝殻腹縁による連続刺突文である。しかも，その施文部位は，口縁部周辺に限られている。こうした手法は，実は，早期土器群の中でも古相を呈するものである。それは，北九州を中心にして分布する，縄文時代草創期末の突瘤文土器や刺突文土器などを見ればわかるであろう。ただし，この種の土器と中原式土器は，直接つながるものではない。その間に何段階かの土器型式が存在するようである。ただし，そこに系譜的な関連を想定することは十分に可能であろう。

さらに，文様では，第1類の土器の文様施文部位に注目しよう。その部位は，前平式土器のそれに良く似ている。しかも，口唇部と口縁部に見られる文様帯も，前平式土器の特徴と共通性がある。要するに，胴部に貝殻条痕を残す前平式土器に対する，残さない中原式土器という関係のようである。ここに，中原式土器の特徴を，早期初頭に位置付けられる前平式土器との類縁性で理解したい。

そこで，まず，第1類の土器を，文様を中心とするその型式の特徴から，古相を呈すると評価しておこう。



第154図 中原式土器の編年

次に、第5類の土器を見てみよう。この土器が出土している遺跡の中で、山江村城・馬場遺跡を取り上げよう。

この遺跡は、ほとんどの資料が手向山式・石清水式土器であった。つまり、手向山式・石清水式土器のみを出土する、単純な様相の遺跡なのである。その中に、第5類の土器が1点出土している。しかも、その土器は、復元ができる大型の破片である。このことから、これを混入資料とすることはできそうにない。やはり、第5類の土器は、城・馬場遺跡において手向山式・石清水式土器と共伴している。つまり、第5類文様の土器は、押型文系土器群の中でもっとも新しい段階の手向山式・石清水式土器の時期に近いと理解できるだろう。

ここに、中原式土器の型式変遷を、「第1類→第2類→第3類→第4類→第5類」という形で理解することができる。そこで、第1類文様の土器を中原Ⅰ式土器と読み替え、第2類以降も順次同じ仕様で読み替えることにしよう。つまり、中原式土器は、「Ⅰ式→Ⅱ式→Ⅲ式→Ⅳ式→Ⅴ式」と型式変遷すると評価できるのである（第154図）。

⑤中原式土器の編年学的研究

中原式土器は、Ⅰ式からⅤ式までの五つの細別型に分けられて理解できる。では、それぞれはどのような編年の位置に置かれるだろうか。

上記したように、中原Ⅰ式土器は、縄文時代草創期末の突瘤文土器や刺突文土器に系譜が求められ、また、前平式土器との類縁性が想定される。特に、前平式土器との関係は、重要である。そこで、中原Ⅰ式土器と前平式土器との併行関係を想定しておこう。また、中九州東部地域では、これに類した土器に、口縁部周辺に貝殻腹縁による刺突文を施した丸底の土器である、政所式土器と呼べる土器がある。おそらく、この土器と併行関係が想定でき、押型文土器以前という編年の位置が与えられるだろう。北九州では、対象となる土器は発見されていないが、突瘤文土器や刺突文土器から展開した新たな型式土器の存在を予想しよう。

中原Ⅲ式土器と中原Ⅳ式土器は、蒲生・上の原遺跡で出土している。ところで、蒲生・上の原遺跡早期土器群への認識については、前記しているように、押型文系土器群の前半期という枠の中での一括遺物との認識が可能である。つまり、蒲生・上の原遺跡の早期土器群は、押型文系土器群の前半期、早期前葉ごろに位置付けが可能である。このことから、中原Ⅲ式土器と中原Ⅳ式土器は、押型文系土器群の中の川原田式土器・稲荷山式土器・早水台式土器と併行関係があると想定できよう。なお、南九州地域にあっては、不明な点が多々あるが、知覧式土器や吉田式土器を、併行する土器と認識しておこう。

第7表 縄文時代早期前半土器編年対比表

	中 九 州 東 部	中 九 州 西 部	南 九 州 西 部
早 期 前 半	政所式	中原Ⅰ式 中原Ⅱ式	前平式
	川原田式 稲荷山式	川原田式 稲荷山式	中原Ⅲ式
	早水台式	早水台式	中原Ⅳ式
	下菅生B式	下菅生B式	↑
	田村式	沈目式	中原Ⅴ式
	ヤトコロ式	石清水式	↓
	大分県編年	木崎編年（1996）	新東編年（1992）

これによって、中原Ⅰ式土器と中原Ⅲ式・Ⅳ式土器の中間に入る中原Ⅱ式土器の位置を、川原田式土器直前と認識できるだろう。

そして、最後の中原Ⅴ式土器は、南九州地域での手向山式土器、中九州西部地域での石清水式土器、中九州東部地域でのヤトコロ式土器との併行関係を想定できる。ただし、押型文系土器群の編年において、早水台式土器と手向山式・石清水式・ヤトコロ式土器との間には、下菅生B式土器や田村式・沈目式土器が介在している。そこで、中原Ⅴ式土器との併行土器の範囲を、下菅生B式土器や田村式・沈目式土器にまで広げて理解しておきたい。

⑤まとめ

以上、蒲生・上の原遺跡出土早期土器群について、その特徴と編年の位置を考えてきた。その結果、新たな見解として、中原式土器の設定とその細分、そして、九州早期土器群の中での編年の位置を示すことができた。以上を整理して、第7表に掲げたものが、早期前半編年表（案）である。この早期前半編年表（案）の提示をもって、「縄文時代早期土器群の編年学的研究」のまとめとしよう。

3. 縄文時代早期の人びとの生活実態

①蒲生・上の原遺跡の遺構・遺物の特徴と評価

縄文時代早期の人びとが生活を営む際の施設には、竪穴式住居と呼ばれる家屋、集石・石組炉・炉穴（連結土坑）などの食物調理・加工用の施設などがある。また、祭祀に使われたと想像される施設も発見されることがある。集落外には、陥し穴という狩猟用罠も作られる。

生活用品としては、煮炊き用の容器としての土器が第一にくる。また、刺したり、突いたり、切ったり、磨ったりという作業に使われる石製の道具もある。例えば、狩猟具としての石鏃・石槍など、堅果類の製粉用具としての磨石・敲石と石皿・台石、切裁・穿孔などの工作や食物解体に使われる削器・石錐・楔形石器・石斧・剥片などである。その他、木製の道具や骨角製の道具もあったものと想定される。

また、生活用品ではなく装飾品や祭祀具も存在する。例えば、耳栓・耳飾り・胸飾り、土偶やトロト

ロ石器・男性器形石製品などである。

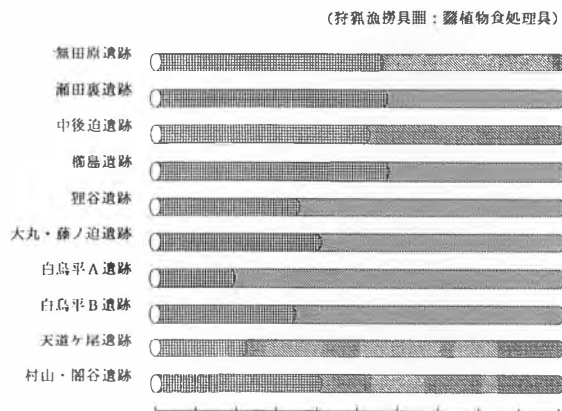
このように、縄文時代早期の生活実態は、内容豊かである。

ところで、蒲生・上の原遺跡では、縄文時代早期前葉ごろに属する遺構や遺物が出土した。ただし、その量や内容は、華々しいものではない。しかし、そこにも人びとの息づかいがあったはずである。そうした観点から、当時の人びとの生活実態について、考察していこう。

遺構では、炉穴1基を検出した。私は、この種の遺構と南九州の早期の初め頃に見られる「連結土坑」とは同じものである、と考えた。その根拠は、第Ⅲ章第3節の中の「まとめ」の項で示しているので繰り返さないが、それは、熊本市梶尾遺跡で検出された連結土坑の存在から想定したものである。そうした点では、その種の用途の問題は、構造の特異性も含めて、広く日本列島の縄文時代研究における今日的課題の一つであると考えられる。

ただし、課題を言うだけでは始まらない。それを使った、当時の人びとの生活実態についての話題に一步踏み出してみたい。そこで遺構から次に、遺物、特に石器に目を転じよう。

石器も少なく、10点が出土した。その内訳は、楔形石器1点、磨石・敲石5点、石皿・台石2点、石核1点、剥片1点であった。出土点数が少なく、しかもその石器組成も単純である。これは、当時の石器組成の一部を示しているにすぎないが、こうした石器組成の特徴も、当時の人びとの生活における活動の一面を表しているものと評価できるだろう。そ



第155図 中九州西部における
狩猟・漁撈具と植物食処理具

ういう面では、重要な資料と言えるだろう。

蒲生・上の原遺跡の石器組成の特徴は、第一に、石鏃などの狩猟具が欠如することにある。第二に、加工具としては楔形石器のみで、通常は多量に出土するはずの削器などを欠いている点である。第三に、植物食処理具の存在である。

この三つの特徴によって知りうることは、狩猟活動を欠き、植物採集に依存した生活である。それは、狩猟具の欠如と共に、狩猟した獣の解体をおこなう際の各種加工具の欠如、そして植物食処理具の存在から、そうした想定が可能である。

②中九州の石器組成の特徴と評価―無田原遺跡の報告から―

私は、大津町・旭志村無田原遺跡の報告（木崎1995）の際に、縄文時代早期の石器組成の問題を取り上げた。それは、特に、狩猟・漁撈具と植物食処理具との対比であった。その結果を整理したのが、第155図で示したグラフである。

これを見てもみると、様相の異なる二つの傾向に分かれることが知れる。それは、無田原遺跡・瀬田裏遺跡・中後迫遺跡・櫛島遺跡のように狩猟・漁撈具が高い比率を占める様相と、狸谷遺跡・大丸藤ノ迫遺跡・白鳥平A遺跡・白鳥平B遺跡・天道ヶ尾遺跡・村山閼谷遺跡のように植物食処理具が高い比率を占める様相である。この二つの傾向は、それぞれ前者の狩猟・漁撈具が高い比率を占める様相が中九州西部地域北部の阿蘇山西麓周辺にあたり、後者の傾向がその南部にある人吉盆地にあたるというように、地域の違いでもあることを指摘できる。

ただし、この傾向も、無田原遺跡の報告でも指摘しているように、狩猟・漁撈具と植物食処理具とは使用する場が異なったり、それぞれの石器では使用回数が違っていることを認識しておく必要がある。つまり、集落外で使用され、しかも消耗度が高い石鏃などの狩猟・漁撈具については、そうした要素を経たの遺存であり、現実の比率よりもさらに膨らませる必要がある

こうした事を勘案して推定したのが、次の生活形態であった。縄文時代早期にあって、無田原遺跡を含む阿蘇山西麓周辺では狩猟・漁撈活動が堅果類採

集を含む植物採集活動を凌いでいた生活形態であった。これに対して、人吉盆地内では狩猟（・漁撈）活動と堅果類採集を含む植物採集活動とを並立させた生活形態であった。

そして、私は、その起因として次の三点を挙げた。第一は、人吉盆地内では定住性の強い集団、阿蘇山西麓付近では遊動性の強い集団が生活を営んでいた可能性。第二は、季節的に地域を越えて生活圏が変更された可能性。第三は、植生の違い。私は、この三つの点が絡むことによって、縄文時代早期の人びとの生活が維持されていたと考えたのである。

③蒲生・上の原遺跡での生活実態

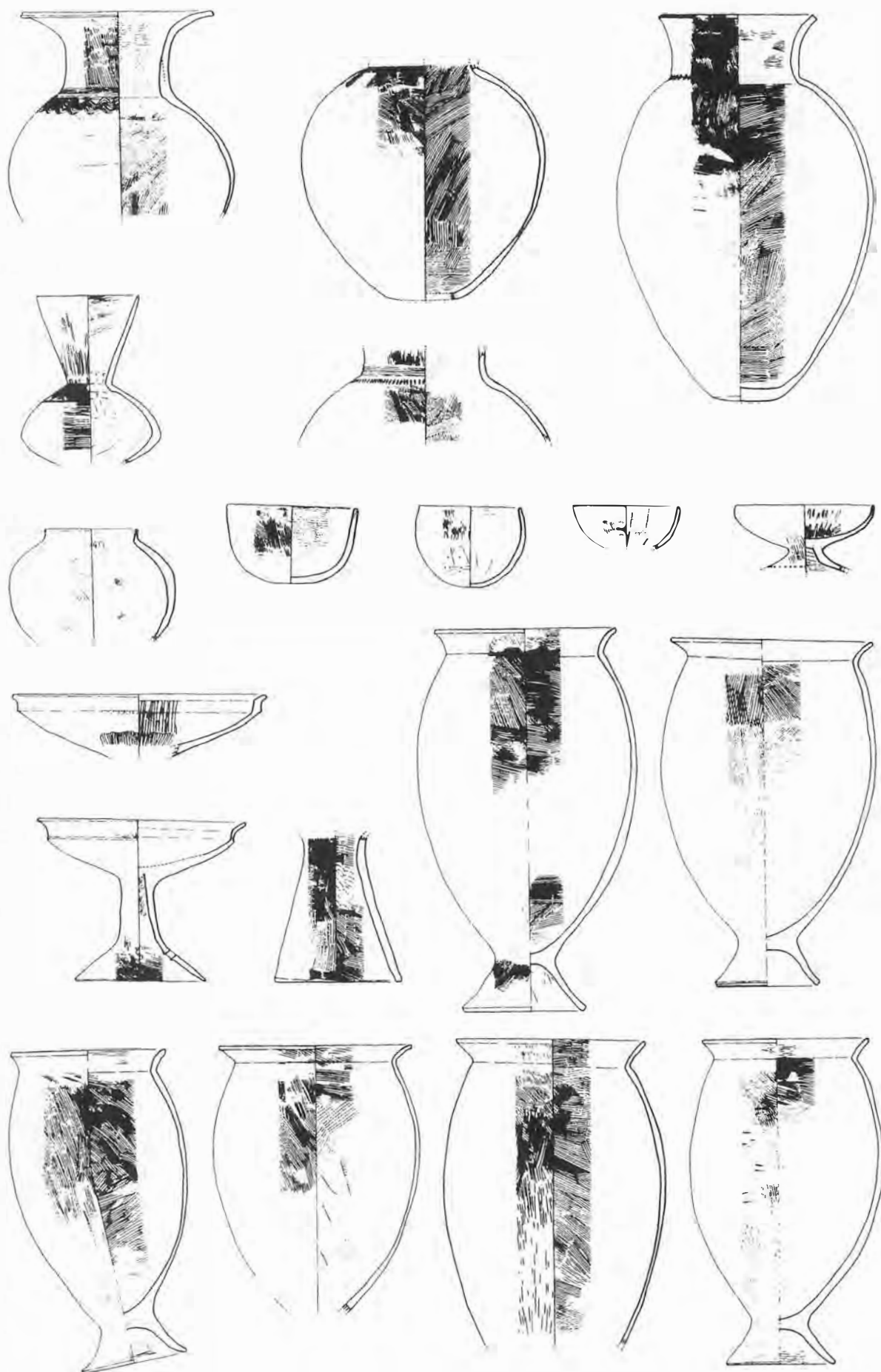
次に、上記してきたことを参考にして、蒲生・上の原遺跡での人びとの生活を考えてみよう。

狩猟具や捕獲した獣の解体をおこなう際の各種加工具の欠如、そして植物食処理具の存在から想定した、蒲生・上の原遺跡での人びとの生活は、狩猟活動を欠き、植物採集に依存したものである。

ところで、石器が出土した地点の周辺には、中原Ⅲ式・Ⅳ式土器が主体となって出土した。つまり、中原Ⅲ・Ⅳ式土器の頃のものとして、出土した石器をあてることができる。ここに、早期の遺跡ではなかなか明確にしない型式の背後にある限定者（杉原1943）の存在と彼らの生活を認識できるのである。これらの石器は、中原Ⅲ式・Ⅳ式の頃の人びと、つまり中原Ⅲ式・Ⅳ式人によって使われていたのである。彼らは、植物採集に依存した生活をおくっていたということである。

しかし、彼らの生活は、植物採集のみに依存していたとは考えられない。やはり、石器組成の一部を示しているにすぎないという意味から、彼らの生活の一面を示しているだけだと評価できるのではないだろうか。つまり、蒲生・上の原遺跡は、中原Ⅲ式土器から中原Ⅳ式土器にかけてのある数段階、堅果類が採集される季節にだけ人びとが居住した跡であるということである。

縄文時代早期、それは、狩猟採集段階の時代であった。当時の人びとは、移動をしながら一年をその時々身の周りにある食物に依存しながら生活していた。ただし、それは、場当たりのものではなく、季節



第156図 1号住居跡出土土器

に則した極めて計画的な移動生活であったと想像される。例えば、ドングリ等と俗称される堅果類は採集される時期に限られるものであり、そのためには、その時期に集中的に採集活動をする必要があるだろう。また、獣が体内に脂を溜め込んだ冬場が主な猟期となったに違いない。

一方、こうしたシーゾナルな移動生活の中で、人びとは、自分たちの組織も変えていった。例えば、小さな単位集団で活動することが効率的な場合には少人数で対応し、シカやイノシシなどの中型獣を対象とした組織的な捕獲が要求される場合には複数の単位集団が集合した。おそらく、彼らは、活動の中身に合わせて、流動的に社会組織も変化させていったと考えられる。

蒲生・上の原遺跡で見つかった生活の痕跡は、遺構や遺物の量や内容から考えて、極めて小さな単位であった。土器型式としても、主体となるものは中原式土器の中の二つの型式が1～2個体程度である。これから推定できるのは、当地での生活がもっとも小さな単位集団でおこなわれていたこと、活動の中心が堅果類を初めとする植物食採集活動であったことである。また、堅果類採集活動という性格から、季節は、現在の秋に相当する頃であったろう。

中原Ⅲ式・Ⅳ式人たちは、蒲生・上の原遺跡に来て、短期間の居住ではあったが、堅果類やその他の植物食の採集をおこないながら生活していた。

彼らの道具箱の中身を覗いてみれば、弓や矢柄を加工したり、動物を解体したり、骨や角を削ったり彫ったりする道具が無かった。それらは、彼らにとっての今の生活にはまったく必要の無い道具類であったからである。その代わりに、彼らは、採集した食用の植物を入れるための籠を持っていたに違いない。森に入る時に携帯する籠、集落に備えつけている籠、大小さまざまな籠があったはずである。また、堅果類の堅い殻を割ったり、中身を磨り潰す時に使う磨石・敲石と石皿・台石も持っていた。

彼らは、当地でこうした生活を送っていたが、その暮らしも一時であったようで、すぐに、別の場所へ移動していった。そこは、冬の狩りに備え、みんなが集まり、共同生活をおくる場所である。そこで

は、多種多様な石器を使った生活が待っている。

4. 弥生時代後期土器群の編年学的研究

今回の調査では、竪穴式住居跡や濠の中から、多量の土器が出土した。器形には、壺形土器・鉢形土器・器台形土器・高坏形土器・ジョッキ形土器・杓子形土器・甕形土器があった。そこで、この中で、もっとも一括資料に近い状況にある、竪穴式住居跡の出土土器について、その型式学的研究をおこない、菊池川中流域の弥生式土器の編年学的研究の一助としよう。

そこで、型式学的研究をおこなうに耐えうる内容の竪穴式住居跡の出土土器群を取り上げ、その型式学的特徴について見ることから始めよう。その住居跡は、1号住居跡、4号住居跡、5号住居跡、6号住居跡、11号住居跡である。

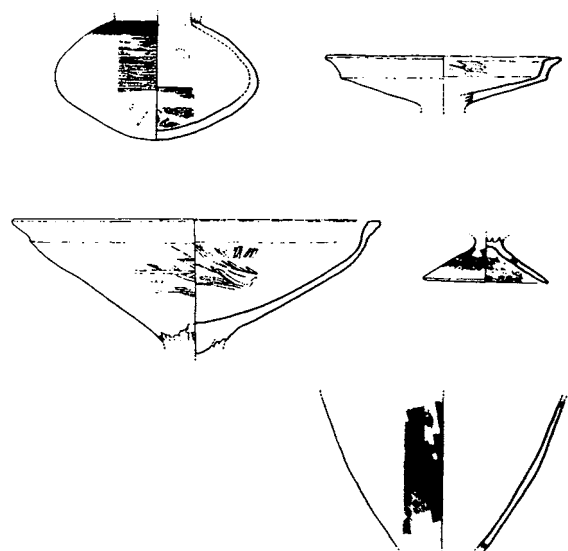
①竪穴式住居跡出土の資料

1号住居跡 出土土器には、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、甕形土器がある。

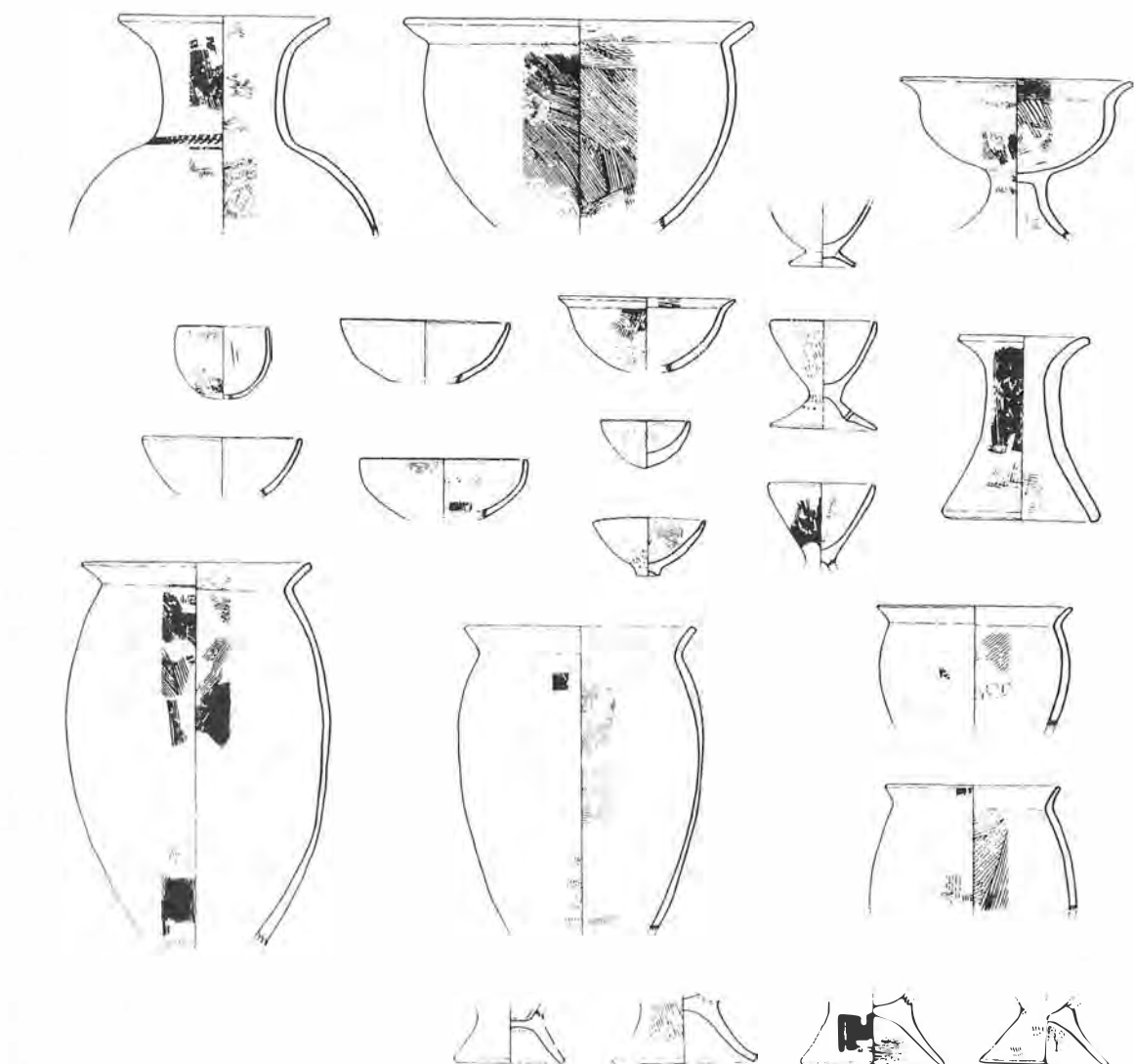
壺形土器には、長頸素口縁と短頸素口縁がある。長頸素口縁の壺形土器には、口縁部がラッパ状に開くものと弱く外反するもの、直線的に開くものがある。底部は、凸レンズ状の平底である。頸部と肩部との境周辺には、櫛描文や篋状工具による刺突文などの文様がある。構成は、下記の種類がある。

櫛描平行文+垂下櫛描平行文

櫛描平行文+櫛描波状文



第157図 4号住居跡出土土器



第158図 5号住居跡出土土器

篋状工具による刺突文

二本沈線文内の櫛描波状文

櫛描平行文+篋状工具による刺突文

短頸素口縁の壺形土器は、胴部が強く張り出して窄まり、その後、頸部で強く折れ曲がり、真っ直ぐな短い口縁が付くという器形である。

鉢形土器には、丸い底部から曲線的に直口縁へ至る土器と、それに脚台を付けたものがある。深めの土器と浅めの土器とがある。

高坏形土器は、坏部が脚部から直線的に長く開いた後、強く屈曲して立ち上がり、さらに強く外へ折れて口縁に至る器形である。口縁部が短くのびるものと、長くのびるものがある。

器台形土器は、筒形である。口縁部下、胴部上位付近にくびれが見られる。

脚台付きの甕形土器は、胴部のほぼ中央ないしや

や上に、最大径がある。脚台は低く、あまり反らないものとやや反り気味のものとがある。胴部中位付近には、わずかにタタキの痕跡が見られる。

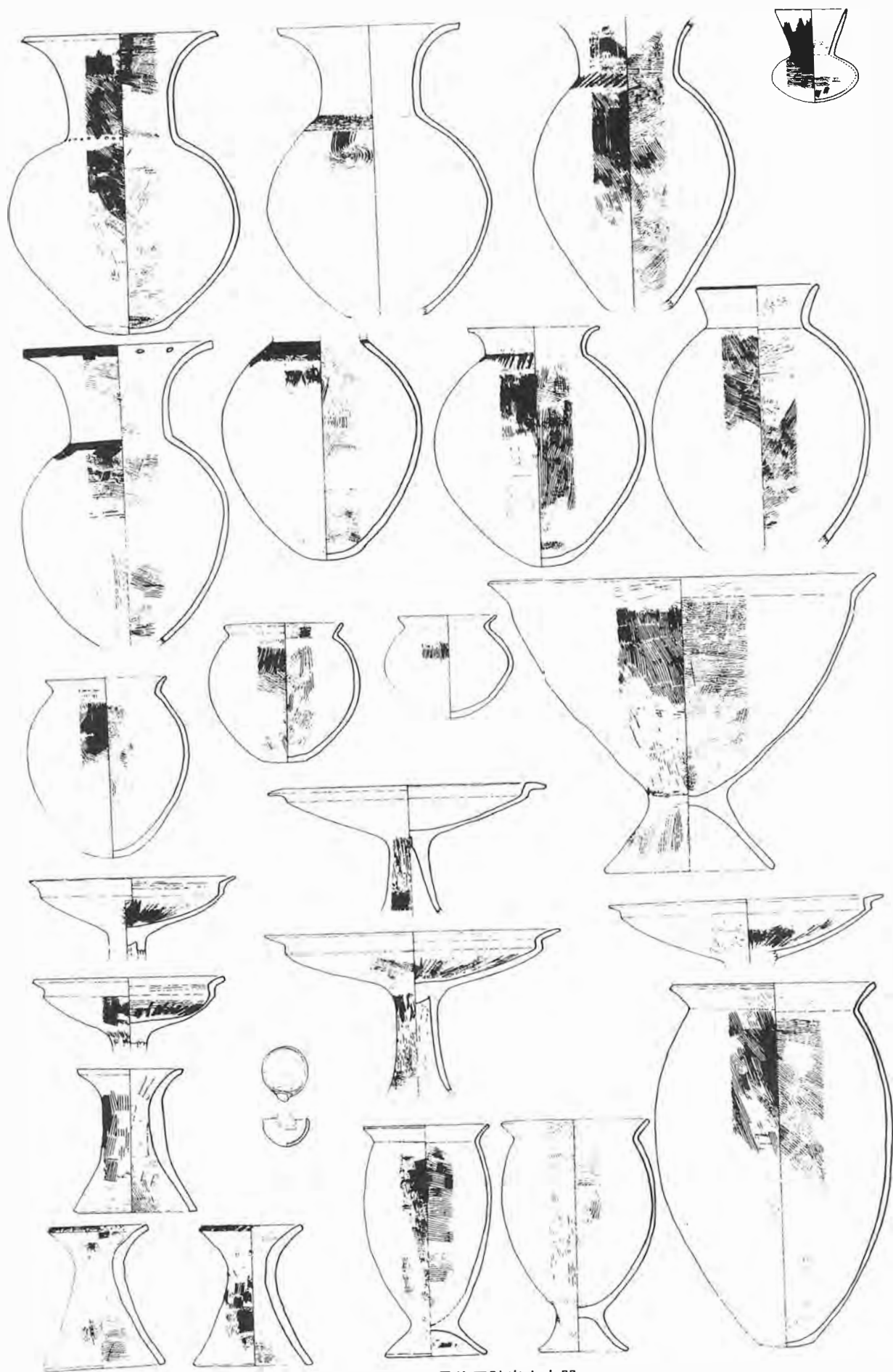
4号住居跡 出土土器には、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、甕形土器がある。

壺形土器は、長頸の土器である。肩部には、櫛描波状文が施される。

鉢形土器は、脚台のみである。やや丸みをもちながら胴部へ至るという体部が付くだろう。

高坏形土器は、坏部がわずかに丸みを持って直線的に長く開くものと、丸みをもたないものがある。また、前者は、屈曲せずに口縁部へ丸く移行し、後者は、強く屈曲して真っ直ぐに立ち上がった後に、短く外へ突き出す。

5号住居跡 出土土器には、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、甕形土器がある。



第159図 6号住居跡出土土器

壺形土器は、長頸素口縁である。口縁部は、ラッパ状に開き、頸部と肩部との境には、篋状工具による刺突文が見られる。

鉢形土器には、屈曲口縁と直口縁がある。屈曲口縁の鉢形土器は、胴張りの強いものと張りが弱いもの、張らずに口縁へ移行するものがある。直口縁の土器には、丸底と脚台付きがある。丸底の土器には、深めのもの、浅めのものがある。脚台付きには、小さい脚台を持って口縁部が立たないもの、ワイングラス状の深い鉢部のものがある。

高坏形土器の坏部は、深く、丸みをもって立ち上がった後に、屈曲して口縁へ移行する。

器台形土器は、筒形である。くびれは胴部の中でもやや上めにある。

脚台付きの甕形土器では、全体の器形でそれと分かるものはない。口縁部が「く」の字に屈曲し、胴部のほぼ中央部ないしやや上に、最大径がある。調整の痕跡として、タタキは残っていない。胴部から脚台までの資料がないが、出土した脚台には、脚内面の天井部に砂の付着が見られる資料がある。

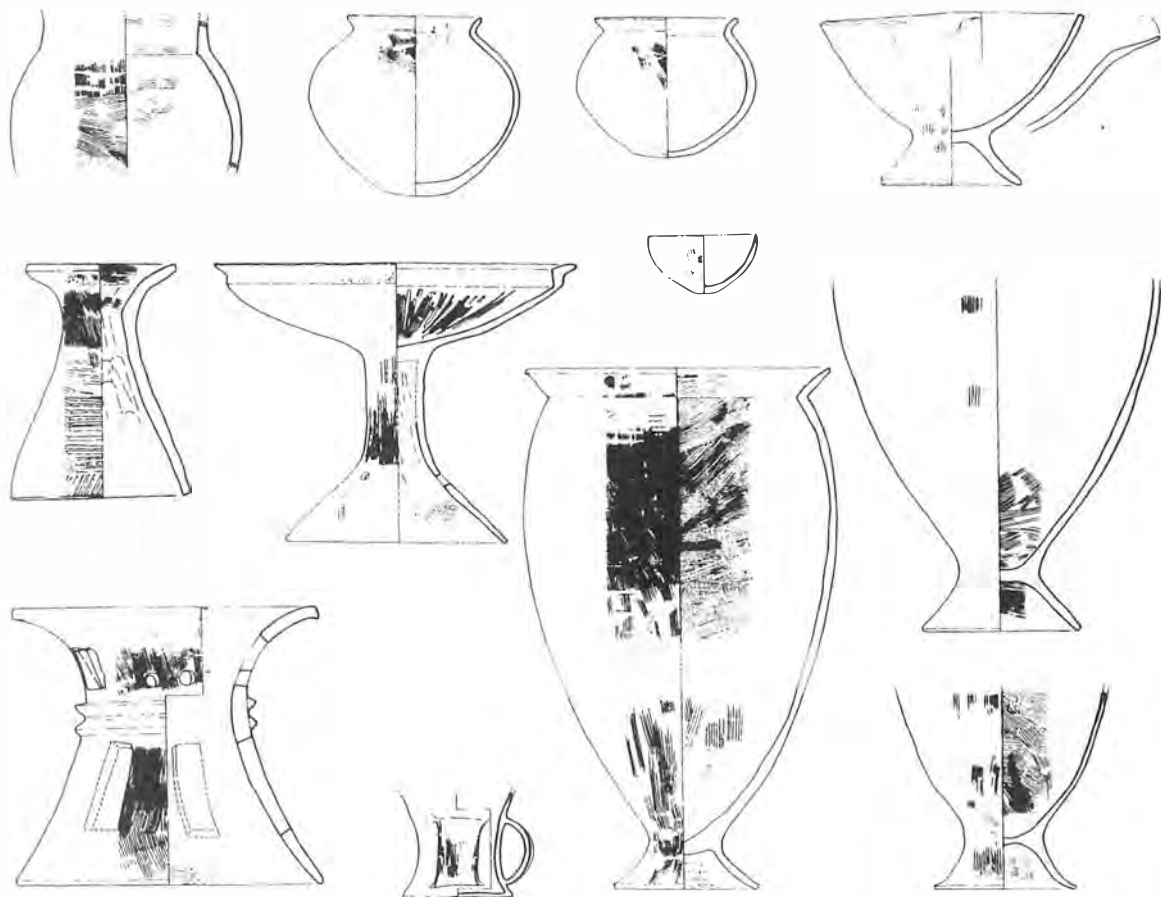
6号住居跡 出土土器には、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、杓子形土器、甕形土器がある。

壺形土器には、長頸素口縁と短頸素口縁がある。長頸素口縁の土器の頸部と肩部との境には、櫛描文や篋状工具による刺突文などの文様がある。その文様の構成は、次のような種類がある。

櫛描平行文+櫛描の二段波状入組文
櫛描平行文+櫛描による下向き連弧文
櫛描平行文+櫛描垂下鉤形文
篋状工具による押引文
棒状工具による刺突文
櫛描平行文

口縁部は、ラッパ状と直線的に斜めに開くものがある。底部は、凸レンズ状の平底、上げ底の平底、丸底がある。

短頸素口縁の土器は、無文と有文とがある。無文の土器は、ラッパ状の口縁が付く。有文の土器は、篋状工具による押引文が施される。強く胴が張り、底部や口縁部で強く窄まり、短くて真っ直ぐな口縁



第160図 11号住居跡出土土器

が付く。

鉢形土器には、屈曲口縁で丸底ないし平底のもの、屈曲口縁で脚台付きのものがある。屈曲口縁の土器には、長めの胴部で大きめのもの、短めの胴部で大きめのもの、強く張り出した短めの胴部のもの、小振りのものがある。脚台付きの土器は、わずかに丸みを持って開き、わずかに屈曲して口縁へ至る器形である。脚部は、強く開き、大きくて高い。

高坏形土器は、坏部が脚部から丸みを持ちながら開き、その後に屈曲して立ち、さらに外へ折れる器形である。深めの坏と浅めの坏がある。

器台形土器は、筒形である。胴部のやや上位がくびれるものと、口縁部下がくびれるものがある。

甕形土器の底部形状には、凸レンズ状の平底と脚台がある。胴部のほぼ中央部ないしやや上に、最大径がある。胴部上半部には、薄くタタキの痕跡が観察される土器もある。

この他に、杓子形土器がある。

11号住居跡 出土土器には、壺形土器、鉢形土器、ジョッキ形土器、高坏形土器、器台形土器、甕形土器がある。

壺形土器には、その全体形を示すものがない。

鉢形土器には、屈曲口縁、直口縁、脚台付きで片口が付くものがある。屈曲口縁の土器は、程度の差はあるが胴張りである。直口縁の土器は、丸底から丸みを帯びて口縁へ至る器形である。片口が付く土器の鉢部は、丸みがある。脚台は、大きい。

高坏形土器は、坏部が脚部から丸みを持ちながら開き、その後、屈曲して立ち、また、外へ折れて口縁部となる器形である。

精製の器台形土器がある。くびれ部よりもやや下に三角形凸帯が2本めぐり、円形と長方形の透かしがある。有明海を巡る地域に点々とみられる器形で、この種の土器の編年的な位置が確定すれば、福岡県南部地域や佐賀県と熊本県北部地域との土器編年対比上の基準となるだろう。他に、口縁のすぐ下にくびれ部がくる筒形の器台形土器もある。胴部から裾部までの外面には、平行タタキの痕跡が残る。

甕形土器は、胴部上位に最大径がくる土器だが、胴部中位付近には、タタキの痕跡が残る。

この他に、小型のジョッキ形土器がある。

② 堅穴式住居跡出土土器群の型式学的研究

土器の型式学的研究を行う際には、その土器が持つ型式徴標を見出すことが必要である。そこで、その徴標を念頭に置きながら、それぞれの堅穴式住居跡出土の土器群を検討していこう。

熊本県下の弥生時代後期土器群の研究では、底部形状を含めた甕形土器の器形や調整技法が型式徴標と見なされる場合が多い。これは、中期の黒髪式土器から古式土師器までの型式変化を考えれば、重要な型式徴標と言えそうである。

器形では、まず、胴部形状の変化が型式徴標の一つである。それは、胴部最大径が口縁部近くにあるものから中位ないしその下にあるものへの型式変化である。また、底部形状もその一つである。黒髪式土器の底部形状からの型式変化から辿れる型式徴標である。低い脚台から高い脚台、そして丸底へ、また、古い脚台の内面天井部付近には砂の付着が見られる。口縁部にも、型式徴標がある。それは、中期土器群の平縁の土器から、「く」の字口縁へと移行する型式変化で、古い土器の口縁は、ねる傾向にあり、新しくなると起きる傾向である。

器面調整では、まず表面のナデがていねいなものから、ハケ調整の痕跡を留めるもの、そして、タタキ調整の痕跡を留めるものへという変遷である。そして、最終的には、胴部の全面にタタキの痕跡が残される。

以上の型式徴標を基にして、甕形土器を検討してみよう。

5号住居跡出土の甕形土器は、胴部のほぼ中央部ないしやや上に最大径があり、タタキの痕跡を残さない。また、脚内面の天井部に砂の付着が見られる。これに対して、甕形土器を扱えない4号住居跡を除く、他の住居跡出土の甕形土器は、胴部最大径の位置に大差はないものの、胴部中位付近に薄くタタキ調整の痕跡を留めている。ここに、5号住居跡と他の住居跡との間に、段階差を認められるだろう。ただし、その差も、器形の形状に大きな型式差を見出せないで、隔絶した関係にはないようだ。これは、裏を返せば、1号住居跡・6号住居跡・11号住居跡

の甕形土器の間にそれほどの型式差が見出せないことの証拠でもある。

次に、器台形土器に目を転じよう（第161図）。5号住居跡の土器と系譜を同じくするものが、6号住居跡で出土している。それは、3点ある。一つは、やや小振りの土器である。5号住居跡例に近い特徴を示している。他の二つは、5号住居跡出土例よりもくびれの度合いが強くなっている。5号住居跡と6号住居跡の間での、器台形土器の型式変化が認識される。

もう一種の器台形土器を扱えば、1号住居跡と11号住居跡とが関係付けられる。いずれの土器も、くびれ部が口縁近くにあり、そこから裾部の端部までが長いという器形的特徴が共通しているので、同じ系譜に置かれるものである。ただし、1号住居跡の例の器面にはハケ調整の痕跡のみで、11号住居跡の例にはタタキ調整の痕跡が全面に残されているなど、この両者には、型式差が認められる。つまり、1号住居跡と11号住居跡の出土土器には、甕形土器では見出せなかった型式差が認識される。

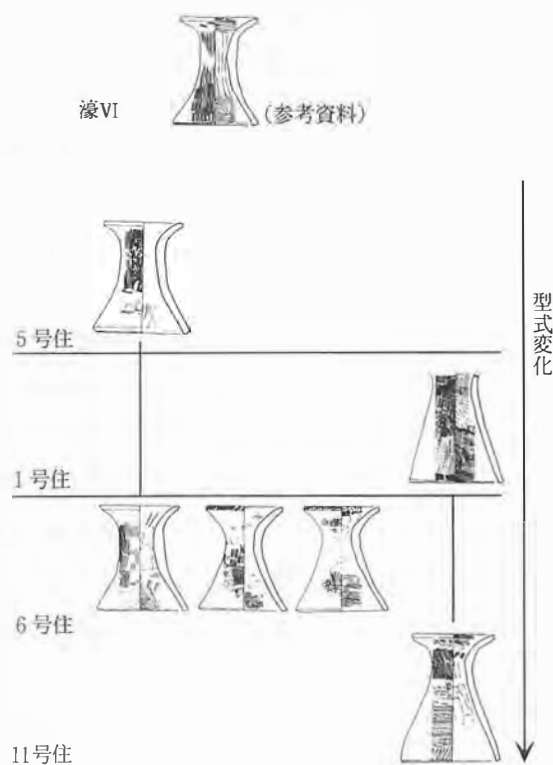
高坏形土器は、5号住居跡を除いて、同じ系譜に置ける資料が出土している。その器形変化を見てみ

よう。この土器は、熊本県北部を中心に見られる特徴的な土器である（第162図）。

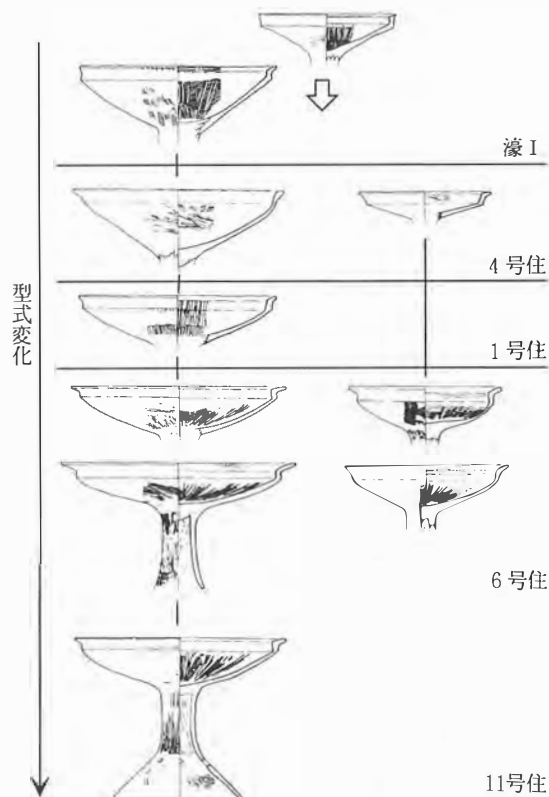
4号住居跡出土例は、坏部がわずかに丸みを持つが、ほぼ直線的に長く開くものと、丸みをもたない杯部のものである。口縁部の屈曲の度合いには、程度の差があるが、外への突き出しは弱い。これに類するものでは、1号住居跡例に近い。それは、坏の体部の丸みは、4号住居跡例よりも強いが、口縁部の突き出しは、1号住居跡例に類似している。これに対して、6号住居跡と11号住居跡の高坏形土器は、体部の丸みがさらに強くなっている。さらに、口縁の突き出しは、6号住居跡の例ではより長く、11号住居跡の例では、短くはあるが、より明瞭である。

ところで、濠Ⅰから出土している土器群の中に、この種の高坏形土器の祖形となるものが見出せた（第162図）。それは、瀬戸内地方に系譜が求められる土器である。器形的な特徴は、やや反り気味に開く体部、屈曲して直に立ち上がる口縁部と強く外に摘み出された端部にある。この種の土器は、中期末ないし後期初頭に位置づけられる土器である。

ここに、高坏形土器の型式変化を認識することが可能だろう。つまり、濠Ⅰ出土の高坏形土器を祖形



第161図 器台形土器の型式変化



第162図 高坏形土器の型式変化

にして、直線的に開く体部と突き出しが弱い口縁の土器（4号住居跡）が成立する。次には、口縁部の突き出しは弱いが、体部に丸みがでる土器（1号住居跡）へと変化する。そして、この土器は、体部の丸みがさらに増し、口縁の突き出しがより長く、またより明瞭になる土器（6号住居跡・11号住居跡）へと変化する。

③ 竪穴式住居跡出土土器群の編年学的研究

これまで、1号住居跡、4号住居跡、5号住居跡、6号住居跡、11号住居跡出土の土器群について、型式学的研究をおこなってきた。その結果、甕形土器や器台形土器や高坏形土器に、明瞭な型式徴標を見出すことができて、その型式変化を認識することができた。そこで、こうしたことを整理して、竪穴式住居跡出土土器群の編年学的研究をおこなってきたい。

甕形土器の型式変化からは、5号住居跡出土例を一番古く、1号住居跡・6号住居跡・11号住居跡出土例をその次の段階以降に置くことが窺われた。これを序列化によって整理しよう。

5号住居跡→1号・6号・11号住居跡

器台形土器には、次の二つの系譜にある器形が存在する。それぞれの器種ごとに型式変化を見て、その序列化を試みよう。

一つ目は、幅広で小振りの器台形土器で、5号住居跡と6号住居跡で出土している。器形変化として、6号住居跡出土例の中に、くびれの度合いが強い土器が2例存在するのが注意をひく。器台形土器の型式変化として、くびれ部の明瞭化は一つの指準となることからすれば、6号住居跡例を後出の様相であると評価できるだろう。つまり、以下の序列化が可能だろう。

5号住居跡→6号住居跡

二つ目の器台形土器は、くびれ部が口縁部下にあり、裾端部までが長くのびた器形をとる。この土器は、1号住居跡と11号住居跡で出土している。器形としては、11号住居跡例が裾下半部で内反りになるのを除いて、さほどの違いは見られない。ただし、器面調整で違いがある。それは1号住居跡の例の器面には、ハケ調整の痕跡が見られるのに対して、11

号住居跡例ではタタキ調整の痕跡が留められている。これは、11号住居跡例が後出の様相であることの証拠であり、以下の序列化が可能である。

1号住居跡→11号住居跡

高坏形土器では、同じ系譜に置かれる土器が1号住居跡・4号住居跡・6号住居跡・11号住居跡で出土している。濠Ⅰ出土の高坏形土器を祖形とするこの土器は、坏体部の器形変化と口縁部の突き出し方の度合いによって、以下のような型式変化が認められる。

4号住居跡→1号住居跡→6号・11号住居跡

以上の結果を基にして、1号住居跡・4号住居跡・5号住居跡・6号住居跡・11号住居跡出土の土器群を編年しよう（第162図）。ただし、これらの住居跡は、今回の調査によって検出されたものであり、未調査区に異なる時期の住居跡が存在している蓋然性も高い。また、今後、調査が実施される場合も予想される。こうしたことを考え合わせると、各種数字やアルファベットを付した連番制の時期名の使用は差し控えることが肝要だろう。以上の理由から、「住居跡出土土器群期」という時期名称を使用する。なお、明確な画期の場合には「期」、その細分期には「亜期」という名称を採用する。

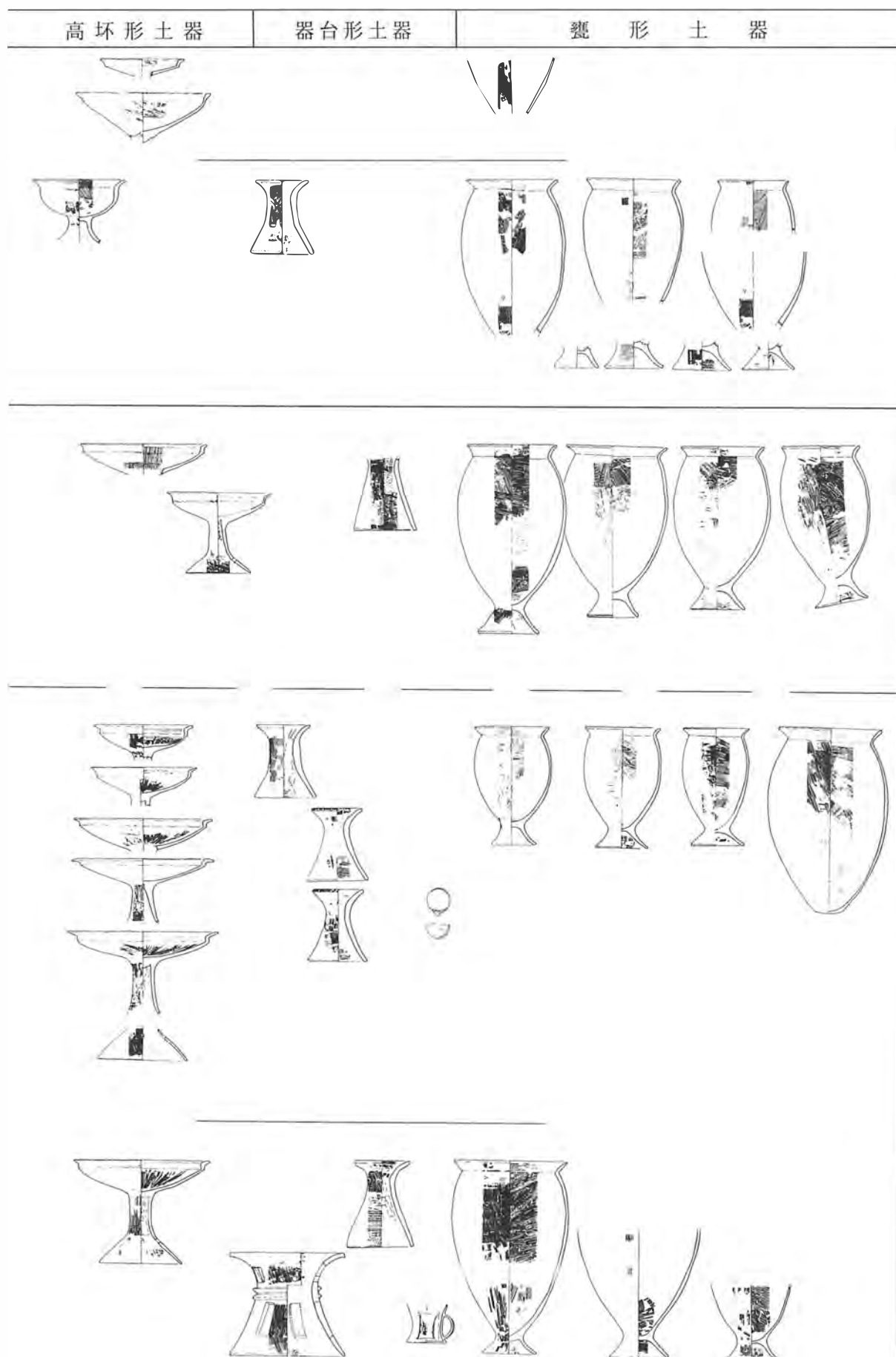
もっとも古く位置づけた4号住居跡と5号住居跡の出土土器では、比較する資料が見当たらない。ただし、4号住居跡は、出土した高坏形土器が古相を呈することにより、この段階であると考えられる。また5号住居跡は、甕形土器の形状や器面調整という型式の特徴、器台形土器の型式の特徴から、この段階と考えた。そこで、「4号・5号住居跡出土土器群期（以下、4号・5号住土器群期）」と呼ぶことにしよう。

なお、4号住居跡と5号住居跡との時期的な前後関係については、明確ではない。将来、これも「4号住居跡→5号住居跡」という形で、分期される可能性も残されている。

この「4号・5号住土器群期」に後続する時期の資料として、1号住居跡の出土土器がある。この資料の編年的位置については、高坏形土器の体部形状や口縁部の突き出し方という型式の特徴、そして器

	壺形土器	鉢形土器
4号・5号住居跡出土土器群期		
1号住居跡出土土器群亜期		
6号・11号住居跡出土土器群亜期		
11号住居跡		

第163図 蒲生・上の原遺跡出土弥生式土器の編年



台形土器の器面調整における型式の特徴により、4号住居跡の資料に後続し、6号や11号住居跡に先行すると認識した。ただし、1号住居跡と6号・11号住居跡とでは、器面にタタキ調整の痕跡をわずかに留める甕形土器の存在では共通している。また、壺形土器の型式の特徴にも違いは認められない。つまり、明確な画期をここに求めることはできないだろう。そこで、1号・6号・11号住居跡を一括する時期の中での、古い様相を呈する亜期という取り扱いをしよう。そこで、この時期を「1号住居跡出土土器群亜期（以下、1号住土器群亜期）」と呼ぶことにしよう。

6号・11号住居跡の資料は、「1号住土器群亜期」に後続することから、「6号・11号住居跡出土土器群亜期（以下、6号・11号住土器群亜期）」と呼称したい。これは、今回検出した竪穴式住居跡の出土資料の中で、もっとも新しい段階である。ただし、11号住居跡では、器面にタタキ調整の痕跡を残す器台形土器が出土しており、6号住居跡とは様相を異にする要素も見出せる。11号住居跡の資料が少なく、その前後関係については、明確ではないが、将来的には分期される可能性も高い。

以上のように、蒲生・上の原遺跡の竪穴式住居跡出土土器群は、下記のような編年でまとめられることが分かった。

4号・5号住土器群期→1号住土器群亜期→6号・11号住土器群亜期

そこで、次には、菊池川流域の弥生時代後期の中に位置付ける作業を試みてみよう。

④菊池川流域の後期弥生式土器編年上の位置

菊池川流域の後期弥生式土器編年研究は、古く野部田式土器を設定した田辺哲夫氏の研究（1953）をその嚆矢として始まるが、乙益重隆氏の研究（1968）や高木正文氏による研究（1979）も古い。また、それと前後して、緒方勉氏（1970）、佐藤伸二氏（1970）、松本健郎氏（1974）、勢田廣行氏（1979、1980）、野田拓治氏（1982）、武末純一氏（1982）らの研究論文が発表されている。

さらに近年では、埋蔵文化財の発掘調査の実施件数が増加し、良好な資料が蓄積されるようになった。

その結果、山鹿市方保田東原遺跡の報告で中村幸史郎氏（1982）が、七城町うてな遺跡の報告では西住欣一郎氏（1992）が、「高木津袋編年」を受けての編年学的研究をおこなった。このように、菊池川流域での当該期の様相は、しだいに明らかにされ、整備されてきたのである。

しかしながら、こうした研究にも問題がある。例えば、古い研究では資料不足の感が拭いえず、新しい研究ではひとり単一遺跡の中に止まった分析が中心となっている。つまり、古くからの研究蓄積が、資料増加と連動して総合されないという、研究上でよく起こりうる決定的な問題が横たわっているのだ。そこで、ここでは、こうした問題点を止揚するために、いきおい菊池川流域の後期土器編年について、踏み込むことにした。

高木正文氏は、鹿本町津袋大塚遺跡の調査結果を受けて、津袋Ⅰ期と津袋Ⅱ期という土器編年上の時期区分をおこなった。そして、高木氏は、津袋Ⅰ期を後期前半、津袋Ⅱ期を後期後半に当てた。

中村幸史郎氏は、山鹿市方保田東原遺跡の出土土器の分析を通して、第Ⅰ期から第Ⅴ期までの土器編年をおこなった。後期土器については、津袋編年を骨子として「Ⅱ－a期」を津袋Ⅰ期に、「Ⅱ－b期」を津袋Ⅱ期に当てた。また、「Ⅲ（a，b）期」を弥生式土器から古式土師器への移行期、「Ⅳ（a，b）期」を「庄内式」の併行段階とも位置づけた。しかしながら、高木氏が提示した津袋土器編年図からすれば、「Ⅲ（a，b）期」と呼ばれる土器群は、津袋Ⅱ期の中の後半期に当たりそうである。

西住欣一郎氏は、七城町うてな遺跡の溝跡出土土器の分析を基にして、「うてなA期」と「うてなB期」を設定した。そして、西住氏は、津袋編年との対比をおこない、「うてなA期・津袋Ⅰ期（弥生時代後期前半）→津袋Ⅱ期（弥生時代後期後半）→うてなB期（弥生時代後期終末）」と序列化した。なお、うてなB期は、その様相から、中村氏の方保田東原編年第Ⅳ期に対比が可能である。

以上のように、3氏の編年は、研究対象を異にするとはいえ、ほぼ整合的である。つまり、これらの研究によって、「津袋Ⅰ期→津袋Ⅱ期（津袋Ⅱ期古・

方保田東原Ⅱ－b期→津袋Ⅱ期新・方保田東原Ⅲ期)→方保田東原Ⅳ期・うてなB期」という菊池川流域の後期弥生式土器編年でほぼ落ちついたといっても過言ではない。そうした意味では、今回の検討は、その補足という意味合いが強いだろう。

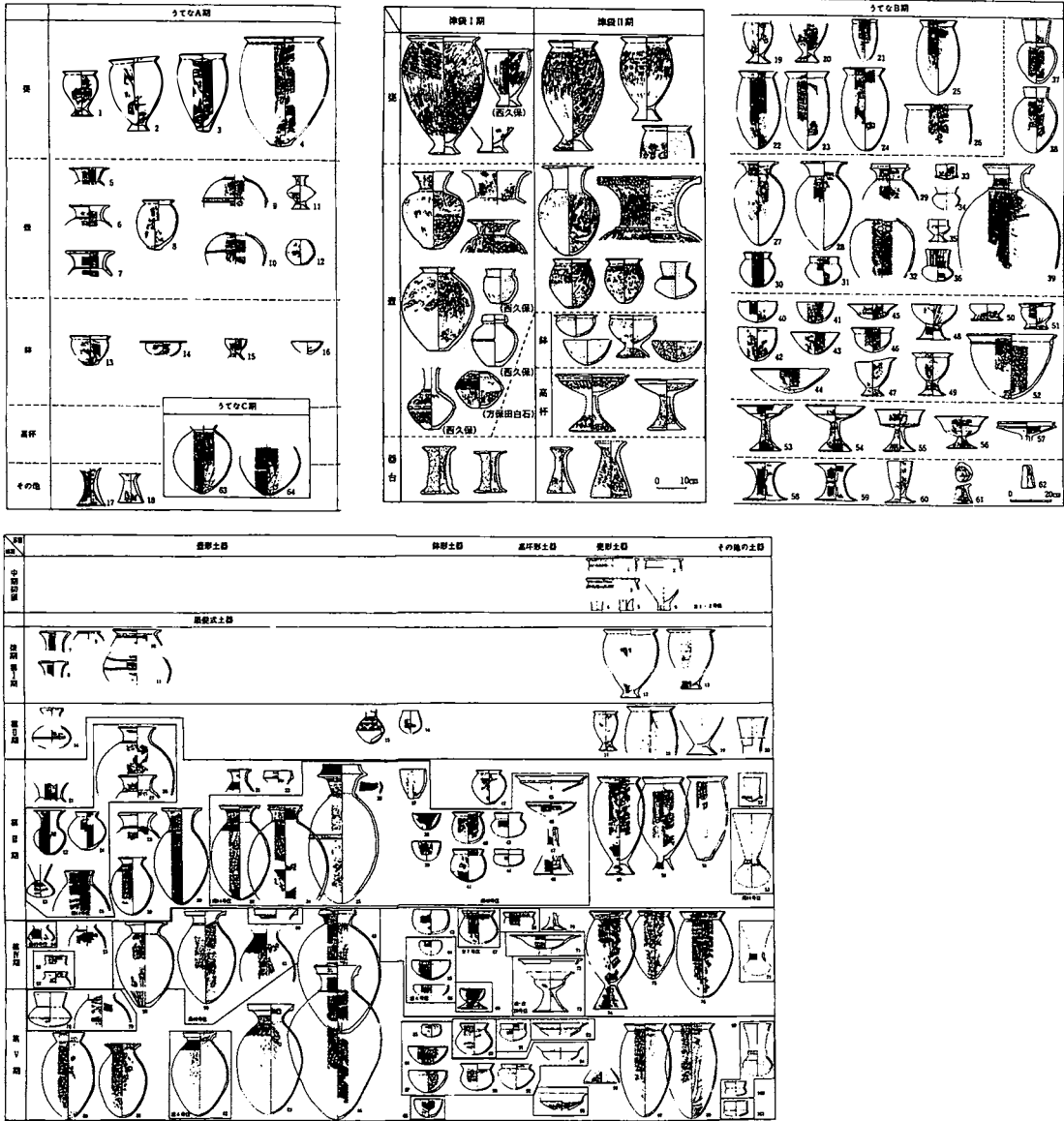
私は、蒲生・上の原遺跡で認識した土器群の編年を、「4号・5号住土器群期→1号住土器群Ⅱ期→6号・11号住土器群Ⅱ期」とした。これを上記した編年の中に組み込んでみよう。

上記した住居跡出土土器群(Ⅱ)期では、津袋Ⅰ期や方保田東原Ⅳ期・うてなB期に比定しうるものは見られない。つまり、津袋Ⅱ期(津袋Ⅱ期古・方保田東原Ⅱ－b期→津袋Ⅱ期新・方保田東原Ⅲ期)に対比しうる土器ということになるだろう。

4号・5号住土器群期の甕形土器は、その最大径

が胴部中位ないしそのやや上にくるという器形やハケ調整の痕跡が残される器面調整の状況などの型式的特徴から、津袋Ⅱ期の中でも津袋Ⅱ期古・方保田東原Ⅱ－b期の甕形土器に当たる。また、5号住居跡で出土しているラッパ状口縁を呈する長頸の壺形土器も、方保田東原Ⅱ－b期の中に見出せる。これによって、この出土土器群期は、津袋Ⅱ期古・方保田東原Ⅱ－b期に対比が可能だろう。

1号住土器群Ⅱ期と6号・11号住土器群Ⅱ期は、大枠としては同一時期として取りまとめられる。これらは、4号・5号住土器群期に後続するということから、津袋Ⅱ期古・方保田東原Ⅱ－b期に後続する津袋Ⅱ期新・方保田東原Ⅲ期に対比できるだろう。それは、出土土器の型式的特徴でも容易に理解する。例えば、器面にタタキ調整の痕跡をわずかに留



第164図 菊池川(上段)・白川上流域(下段) 弥生時代後期土器の編年

める甕形土器や、壺形土器・器台形土器・高坏形土器などの型式的特徴がそれである。ただし、方保田東原遺跡の報告の中で、中村氏は、第Ⅲ期のaとbとの分期の根拠については示されていないので、それぞれの土器群亜期を第Ⅲ期のaとbに関係付けることはできない。

以上のように、蒲生・上の原遺跡の竪穴式住居跡出土土器で認識された、「4号・5号住土器群期→1号住土器群亜期→6号・11号住土器群亜期」という編年序列は、次のように菊池川流域での既成の土器編年の中に組み込むことができるだろう。

「津袋Ⅰ期→津袋Ⅱ期古・方保田東原Ⅱ－b期（4号・5号住土器群期）→津袋Ⅱ期新・方保田東原Ⅲ期（1号住土器群亜期→6号・11号住土器群亜期）→方保田東原Ⅳ期・うてなB期」

ところで、蒲生・上の原遺跡の竪穴式住居跡出土土器を組み込むことによって、菊池川流域の土器編年を補強してきた。そこで、次には、もう一步踏み込んで、これまで設定されてきた既成の土器型式の中で理解することにしよう。

さて、熊本県下の後期弥生式土器の編年学的研究では、古く「野部田式土器」（田辺1953）や「免田式土器」（小林1938）などが設定されている。これらは、それなりに研究史的意義があり、これを正當に評価することがまず第一義にあげるべきことである。

そうした評価をおこなった研究者として、高木正文氏がいる。高木氏は、津袋大塚遺跡の出土土器の型式学的研究を進めた際に、黒髪式土器（中期後半）→免田式土器（後期前半）→野部田式土器（後期後半）という流れで考えられることを提起すると共に、津袋Ⅱ期の土器群を野部田式土器に当てることを主張した。この提起は、十分に傾聴に値するもので、論文発表以来、17年を過ぎてはいるが、新鮮味を感じるものがある。つまり、私は、こうした観点で菊池川流域における後期弥生式土器の編年を試みるものである。

熊本県下の弥生時代後期の土器の祖形は、中期の黒髪式土器に求められる。ただし、黒髪式土器については、その器種構成も含めて、未だ不明な部分が

多い。特に、須玖式土器との共時関係は明確であるが、その終末はわからない。要するに、後期に特徴的な甕形土器の「く」の字形口縁の成立がどの段階にあるのかは、今後とも編年研究の上で重要な視点である。

そうはいっても、甕形土器の「く」の字形口縁は、後期弥生式土器群の特徴ともなっている。そこで、微妙な部分での後期初頭の資料は、明確ではないが、研究史を踏まえれば「く」の字形口縁の出現がそのメルクマールとなっている。

そうした視点で参考資料を菊池川流域に求めれば、菊水町宮の前遺跡21号住居跡で検出された資料がそれに近い。「く」の字形口縁ではあるが、内面の屈曲部に弱い突き出しが見られる甕形土器が、その他の器種と共に、方形の平面形態を呈する竪穴式住居跡から出土している。おそらく、これが後期「く」の字形口縁の原型となった土器であろう。これを黒髪Ⅱ式土器（鏡山・乙益1968、武末1982）や別に設定する土器型式にあてて、後期初頭に位置付けることもできるだろう。ただし、これらは、未整理・未報告であり、その評価は、資料整理・報告後まで待たなければならない。

次の段階は、津袋Ⅰ期である。この期の土器は、後期前半期に位置づけられている（高木1979、武末1982）。そこで、これを参考にして、それに対応する土器型式（様式）を探せば、明確に設定されている土器型式はない。

前記しているが、高木氏は、津袋編年の際に、「黒髪式土器（中期後半）→免田式土器（後期前半）→野部田式土器（後期後半）」という土器型式の変遷を示した。この特徴は、免田式土器の再評価であろう。ただし、この土器型式は、あくまでも、器種構成の中に、重弧文を施文した壺形土器を加えているところに特徴を見出すべきだ。つまり、熊本県下でも、白川流域・緑川流域以南の地域に分布する土器群に対して与えられるべき型式名と考えられる。そういう意味では、菊池川流域の土器型式名としては、不適当であろう。やはり、この地域独自の土器群を表す型式名が必要となる。そこで、これを括弧付きで「西久保式土器」と呼んでおこう。

次の段階は、津袋Ⅱ期古・方保田東原Ⅱ－b期（4号・5号住土器群期）と津袋Ⅱ期新・方保田東原Ⅲ期（1号住土器群亜期→6号・11号住土器群亜期）の時期である。この時期は、後期後半にあたり、その土器群の特徴から野部田式土器に対応するという評価が定着している（高木1968, 武末1982）。

これについては、私自身も同意するところである。ただし、この野部田式土器が、中九州全域の後期後半の時期を代表する土器型式だという評価は当たらない。それは、次に掲げる理由からである。

一つは、菊池川流域では、白川水系型の複合口縁の壺形土器が見られないこと。二つは、後期を通観すれば、白川・緑川流域周辺では重弧文土器が普遍的に器種組成されるのに対して、菊池川流域では組成されないこと。三つは、甕形土器の型式変化として、脚台の長脚化が進む地域（白川・緑川流域周辺）と進まない地域（菊池川流域）とがあること。

以上、三点によって、野部田式土器を拡大解釈するのではなく、菊池川流域に限っての後期後半に属する土器型式として認識することを主張したい。

このように、菊池川流域の後期後半の土器型式を野部田式土器として理解しよう。そして、この土器型式は、次のような細分が可能であろう。野部田Ⅰ式土器を津袋Ⅱ期古・方保田東原Ⅱ－b期（4号・5号住土器群期）、野部田Ⅱ式土器を津袋Ⅱ期新・方保田東原Ⅲ期（1号住土器群亜期、6号・11号住土器群亜期）の分期である。そして、野部田Ⅱ式土器をさらに、蒲生・上の原遺跡の調査結果から、aとbとの亜期に分期して、野部田Ⅱa式土器（1号住土器群亜期）と野部田Ⅱb式土器（6号・11号住土器群亜期）の二つに細分しよう。

以上のように、菊池川流域の弥生時代後期の土器型式編年は、「（黒髪Ⅱ式土器－宮の前遺跡21号住居跡出土土器群）→「西久保式土器」→野部田Ⅰ式土器（津袋Ⅱ期古, 方保田東原Ⅱ－b期, 4号・5号住土器群期）→野部田Ⅱa式土器（津袋Ⅱ期新, 方保田東原Ⅲ期, 1号住土器群亜期）→野部田Ⅱb式土器（津袋Ⅱ期新, 方保田東原Ⅲ期, 6号・11号住土器群亜期）」という序列で理解される。そして、それに後続する方保田東原Ⅳ期やうてなB期の土器

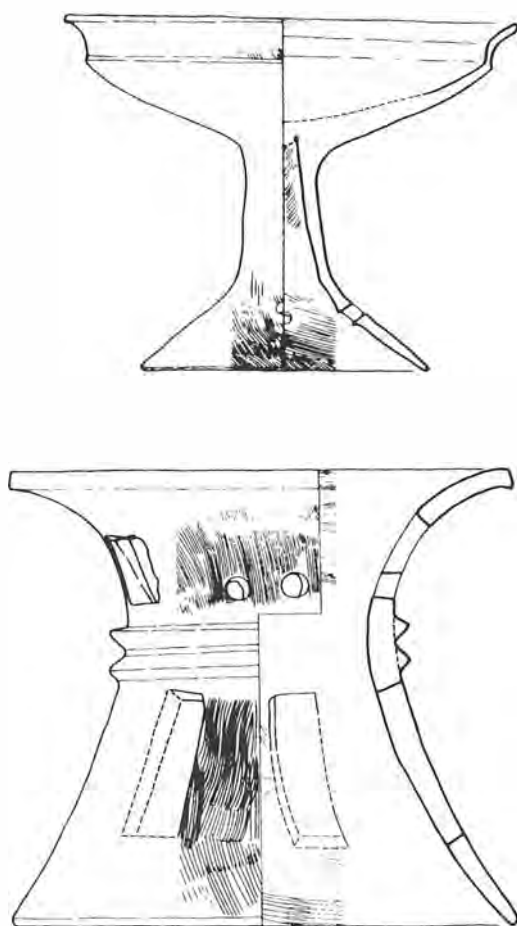
群は、古くても後期終末で、そのほとんどは古式土師器に入るものと認識しておこう。

⑤菊池川流域と周辺地域

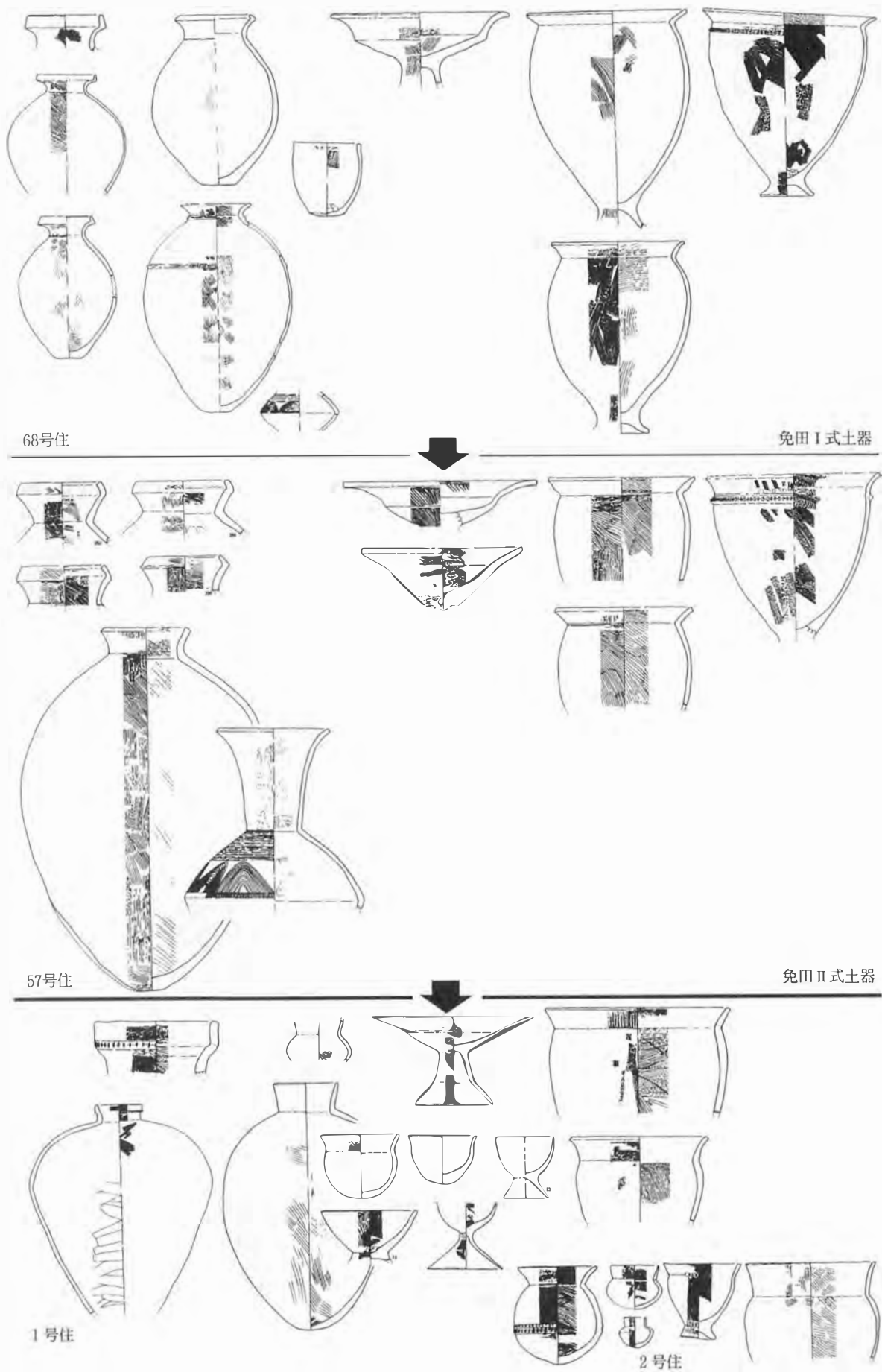
菊池川流域の弥生時代後期土器から古式土師器までの土器は、「（黒髪Ⅱ式土器）→「西久保式土器」→野部田Ⅰ式土器→野部田Ⅱa式土器→野部田Ⅱb式土器→（方保田東原Ⅳ期・うてなB期土器群）」という形で変遷する。では、このように変遷する土器型式と周辺地域との土器とは、どのような関係にあるだろうか。

【「西久保式土器」】これは、後期前半の土器型式である。

白川・菊池川流域では、この型式土器と併行関係にあるものとして、熊本市下南部遺跡（大城・広瀬1979）出土の土器群がある。それは、4号住居跡と12号住居跡から出土した土器群である。いずれも胴部最大径が上位にくる甕形土器である。器形は、「西久保式土器」に近い形状を呈する。また、4号



第165図 編年対比上の土器



第166図 夏女遺跡出土土器の編年

住居跡の甕形土器の内面は、鋤先状を意図したような屈曲部の明瞭な作り出しが見られることから、12号住居跡よりも古相を呈していると判断される。

なお、阿蘇町池田古園遺跡34号住居跡（木崎編1993）出土土器群や高畑赤立遺跡2号住居跡（山田ほか1995）も、この時期の古手の段階に位置付けられるだろう。また、嘉島町二子塚遺跡でのこの時期の土器群が検出されている。このように、白川・緑川流域では、「西久保式土器」と併行する土器群の存在が見られるが、良好な器種組成の資料を欠いている。今後、この点での資料蓄積が求められるだろう。従って、型式設定は、それを待つべきであろう。

球磨川流域では、夏女遺跡68号住居跡（園村1993）出土の土器群が「西久保式土器」と併行すると考えられる。それは、胴部最大径が上位にくる甕形土器を器種組成の中に入れるということ、袋状口縁の型式的特徴や重弧文土器の型式的特徴からそう判断される。器種組成では、重弧文土器や複合口縁を含む壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、甕形土器によって構成されている。なお、この住居跡出土の重弧文土器は、その型式的特徴から最古型式に近いものであろう。器種構成も充実しているので、型式設定の要件も十分であり、これらの土器群を「免田式土器」として再評価しておこう。

【野部田式土器】この土器は、菊池川流域の後期後半の土器型式である。蒲生・上の原遺跡1号住居跡群の高坏形土器には、柳田康雄氏「北部九州後期土器編年」4様式（柳田1987）や蒲原宏行氏「佐賀平野土器編年概要」千住2式（蒲原1995）に型式的に類似した土器がある。

こうした基準を基にすれば、野部田Ⅱa式土器は、この時期と併行関係にあるものと予測できる。また、その前の時期の野部田Ⅰ式土器は、それぞれの編年で言う、3様式ないし千住1式土器との併行関係が予測しうであろう。さらに、蒲生・上の原遺跡11号住居跡群で出土した精製の器台形土器は、型式的に類似した土器が柳田編年5様式ないし蒲原編年惣座0式土器に編年されている。したがって、野部田Ⅱb式土器は、この時期との併行関係が予想される。

つまり、野部田式土器は、下大隈式土器に編年的

に併行関係がある土器型式であると予想される。なお、野部田式土器の前の時期の「西久保式土器」は、下大隈式土器の前に編年されている高三瀬式土器と併行関係があると予想される。

野部田式土器と併行する土器は、白川・菊池川流域でも多く調査されている。主な遺跡には、阿蘇町池田古園遺跡、狩尾方無田遺跡、狩尾湯の口遺跡、陣内遺跡、下山西遺跡、宮山遺跡、大津町西弥護面遺跡、嘉島町二子塚遺跡がある。

この時期の土器の特徴は、前記しているように、白川水系型の複合口縁の壺形土器や重弧文土器の存在、脚台付きの甕形土器の長脚化、という特徴から、菊池川流域の土器群とは峻別すべきであると考えられる。したがって、この地域での新たな土器型式を設定すべきであろう。

なお、Ⅰ式、Ⅱa式、Ⅱb式という野部田式土器における型式細分との対比では、狩尾遺跡群の編年案との対照が可能である。それは、甕形土器の型式的特徴の比較から検討できることで、狩尾Ⅲ期が野部田Ⅰ式土器、狩尾Ⅳ期が野部田Ⅱ式土器ということになるだろう。

球磨川流域では、夏女遺跡57号住居跡（園村1993）出土の土器群が「野部田式土器」と併行すると考えられる。それは、重弧文土器や袋状口縁の壺形土器、高坏形土器の型式的特徴から夏女遺跡68号住居跡（園村1993）出土土器群に後続すること、胴部最大径が中位に下がる甕形土器を器種組成の中に入れるということから判断される。器種組成では、重弧文土器や袋状口縁を含む壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、甕形土器によって構成されている。器種構成も充実しているので、型式設定の要件も十分であり、これらの土器群を免田式土器として理解しよう。そして、「西久保式土器」併行の土器型式を免田Ⅰ式土器、野部田式土器併行の土器型式を免田Ⅱ式土器と評価しよう²⁴。

【後続する土器群】野部田式土器に後続する土器群としては、菊池川流域では方保田東原Ⅳ期やうてなB期土器群が相当する。また、うてなB期土器群で出土している精製の器台形土器や高坏形土器に類似した土器が、蒲原編年惣座1式土器の中に類似した型

式的特徴を示す土器の中にも見られる。したがって、佐賀県地方のこの時期にも併行関係が求められると予想される。

この土器群の特徴は、器面全面にタタキ調整の痕跡を留める丸底の甕形土器が新たに現れることである。また、高坏形土器の口縁の発達も特徴である。これらは、野田拓治氏によって「古閑期」ないし「古閑式土器」として評価された土器群であり、白川・緑川流域の中では、この型式名を今後採用すべきであると考えている。そしてまた、こうした野田氏の視点を通して、菊池川流域の土器群も見直すべき段階にあるものと思われる。

なお、こうした特徴を基にして、白川・緑川流域に併行する土器群を求めれば、狩尾編年の第Ⅴ期の土器群に相当するだろう。遺跡としては、阿蘇町池田古園遺跡、狩尾前田遺跡、狩尾方無田遺跡、陣内遺跡、下山西遺跡、大津町西弥護面遺跡などの遺跡がある。

球磨川上流域では、夏女遺跡1号住居跡が併行するだろう。それは、この住居跡出土の土器群が、袋状口縁の壺形土器、高坏形土器、甕形土器の型式の特徴から夏女遺跡57号住居跡の土器群に後続すること、高坏形土器の型式の特徴が当該期の菊池川・白川・緑川流域で出土するものに類似していること、などから判断される。器種組成では、袋状口縁を含む壺形土器、小型丸底土器、鉢形土器、高坏形土器、甕形土器によって構成されている。器種構成も充実しているので、型式設定の要件も十分である。

なお、2号住居跡（園村1993）出土の土器群は、甕形土器の型式の特徴から、1号住居跡出土土器群に後続すると判断される。ただし、それは免田Ⅱ式土器に後続する土器群の範囲の中にあり、その後半期に位置するものと考えられる。

5. 弥生時代後期の集落景観

蒲生・上の原遺跡は、弥生時代後期の環濠集落である。第1次・第2次の発掘調査によって確認した遺構は、竪穴式住居跡13基、方形周溝遺構1基、濠6単位であった。また、調査に伴って炭化した建築部材が出土したために、その樹種同定もおこなった。

ここでは、こうした調査成果を交え、集落の変遷の概要と集落を取り巻く景観について見ていくことにする。

①集落の変遷

遺構には、竪穴式住居跡が13基、方形周溝遺構が1基、濠が6単位あった。

6単位の濠は、濠Ⅰ～Ⅵと呼んだが、基本的には2本の濠が一つの対となっていた。それは、濠Ⅰと濠Ⅴ、濠Ⅱと濠Ⅲである。そして、これらの二つの対をなす濠の開削には、時間差があり、濠Ⅰと濠Ⅱとの切り合い関係から濠Ⅱの方が新しく開削されていたことが判明した。また、濠Ⅳは、濠Ⅰに切られていたもので、濠Ⅰに先行する。さらに、濠Ⅵは、その端部の状況から濠Ⅱとの関係が深そうであり、濠Ⅱや濠Ⅲと同じ時期である可能性が高い。こうした結果をまとめると、下記のような開削時期の変遷が想定される。

濠Ⅳ⇒濠Ⅰ＋濠Ⅴ⇒濠Ⅱ＋濠Ⅲ＋濠Ⅵ

そこで、次には、開削時期の問題を出土土器の時代的位置付けから見てみよう。

濠Ⅰから出土した土器は、かなりの時期幅が見られた。その中で器種組成を無視して見れば、今回検出した竪穴式住居跡の時期よりも一段階古いものも含まれていた。それは、「西久保式土器」と呼んだ土器の中でも新しい様相を呈する土器、つまり後期前半の終わり頃の土器であった。また、野部田Ⅰ式土器と呼んだ、後期後半の始め頃の土器に近い型式の特徴を持つ土器も目立って出土している。

おそらく、これらの土器型式の時期が集落形成のもっとも初期の段階であったと考えられる。つまり、濠Ⅰやそれに切られた濠Ⅳは、この初期の段階で開削された可能性が高い。

濠Ⅱと濠Ⅲと濠Ⅵは、濠Ⅳ・濠Ⅰ・濠Ⅴの後に開削された。そういう意味からは、野部田Ⅱ式土器の時期の濠の可能性が高い。ただし、出土遺物が少なく、その量的な問題から、時期の特定は不可能である。なお、その廃絶は、濠Ⅲの埋土上位から古墳時代に属する鉄鏃が出土しているので、それに近い時期であろう。これは、蒲生・上の原遺跡でもっとも新しい土器の時期が、野部田Ⅱb式土器の段階であ



第167図 集落の変遷

る後期末であるという事実からも矛盾しない。ここに、濠の開削時期の推定がある程度可能となった。それを、下に示そう。

濠Ⅳ（西久保式土器）⇒濠Ⅰ＋濠Ⅴ（野部田Ⅰ式土器）⇒濠Ⅱ＋濠Ⅲ＋濠Ⅵ（野部田Ⅱ式土器）

ところで、興味深いことは、濠Ⅴが開削の途中で放置されているところであろう。また、濠Ⅰの埋没状況でも、通常自然堆積状態を示さずに、極めて不安定な堆積状況を示す部分が見られた。これもまた、濠Ⅴに類似する状況である。つまり、何らかの要因の下に、濠開削が中断され、その中断途中で掘削土が再び濠内に流入した状況をそこに見て取れるのである。

ところが、濠の開削がそこで完全に無くなるわけではなかった。濠Ⅱと濠Ⅲの掘削が始まったのである。それは、濠Ⅰと濠Ⅱの切り合いで識別できたように、濠Ⅰの自然埋没もかなりの程度進行していた段階である。したがって、そこにはある程度の時間差を認められるはずであるが、それを具体的な時差として認識することはできない。少なくとも、野部田Ⅰ式土器と野部田Ⅱ式土器との間でおきた出来事であったようだ。

一方、調査では、13基の竪穴式住居跡を調査した。いずれも、濠Ⅰの東側から検出したものである。そこで知りうる範囲での、竪穴式住居跡の時期ごとの所属を見てみよう。

野部田Ⅰ式土器の時期の竪穴式住居跡は、出土した土器によって3基と判断した。それは、4号・5号・13号住居跡である。また、7号住居跡もその向きが4号住居跡に近いので、それに該当するであろう。野部田Ⅱa式土器の時期の竪穴式住居跡も3基である。1号・2号・9号住居跡がそれにあたる。野部田Ⅱb式土器の時期の竪穴式住居跡は、3号・6号・8号・11号・10号住居跡の5基である。

そこで、集落の変遷について、時期ごとに概観しよう。

【西久保式土器】この土器型式の終わり頃に集落が営まれ始めた。それが、濠Ⅳである。この濠は、濠Ⅰによって破壊されているが、それぞれが交差する状況は認められない。つまり、濠Ⅳは、濠Ⅰに近い

ルートをとっていたものと判断される。

竪穴式住居跡は、確認できなかったが、おそらくは、調査区の東側の少し高い部分にあるものと予測される。なお、時期所属が不明な12号住居跡は、この時期である可能性は存在する。

【野部田Ⅰ式土器】濠Ⅳが埋没すると、新たな濠がほぼ同じ場所で開削され始める。当時、人びとは、2重環濠の掘削を試みたが、それは途中で断念している。ただし、その契機については、分らない。集落を区画する濠は、濠Ⅰのみである。

竪穴式住居跡では、4号・5号・13号・7号住居跡がこの時期にあたる。集落そのものの拡大は、見られない。ただし、竪穴式住居跡が調査区の東側に顔を見せ始めているので、住居跡の数は確実に増えているようだ。住居跡の配置状況では、4号と5号とでは近接しすぎている。また、4号・7号・13号住居跡と5号住居跡に向きの違いが見られる。こうしたことから、この時期は、二つの時期に細分が可能かもしれない。そういう意味では、濠Ⅴの開削中断は、この時期の新しい段階におこった出来事のようなのである。

【野部田Ⅱa式土器】濠Ⅰや濠Ⅴが埋没すると、次には濠Ⅱと濠Ⅲが開削された。集落の規模が、西側に大きく拡大された時期である。野部田Ⅰ式土器の段階で試みられた二重環濠の造営が、その範囲を拡大させて完成された段階であろう。

竪穴式住居跡では、1号・2号・9号の3基がその時期にあたる。それぞれの位置関係や向きから、いずれも同時期のものであろう。野部田Ⅰ式土器の頃に比べれば、さらに西側に広がってきている。これは、野部田Ⅰ式土器の時期から続いてきた、集落の拡大を表す現象であろうし、さらに西側の未調査区に竪穴式住居跡が存在すると予想される。なお、濠ⅡとⅢの開削は、人口増加を意図した集落範囲の拡大であったろうか。

【野部田Ⅱb式土器】濠Ⅱと濠Ⅲによる二重環濠集落が続いている。おそらく、野部田Ⅱa式土器の時期に用意されたさらに広い集落域に、おそらくは次々に竪穴式住居が造られていったのだろう。

竪穴式住居跡では、3号・6号・8号・11号・10

号住居跡の5基がその時期に入る。ただし、これらはすべて同時期ではない。それぞれの位置関係や向きから、最低二つの時期に分かれるだろう。例えば、11号住居跡と他の住居跡では、向きに違いが認められることは、それを示しているようだ。

【集落廃絶の時期】野部田Ⅱb式土器の時期を過ぎると、集落は廃絶される。それは、弥生時代後期の末である。そして、まさに時代の変わり目を象徴するかのように、濠Ⅲ埋土の上位から古墳時代の鉄鏃2点が出土した。それは、集落廃絶後、しばらく期間を置いた後に執り行われた廃棄儀礼が蒲生・上の原遺跡でおこなわれていたものか、興味は、尽きない。

②集落景観

弥生時代の人びとは、どのような環境の中で生活をしていたのであろうか。彼らの目にはどのような森が映り、彼らの肌は何を感じ取っていたのか。この問題は、私たちが埋蔵文化財の調査をする際の、重要な視点の一つとなるだろう。そうした意味では、当時の環境を復元するための、さまざまな分析をする必要があるだろう。

例えば、水気の多い土地での花粉分析や木製品などの樹種や種子の同定は、重要なデータである。また、各種遺構の中から出土する炭化材の樹種同定も試みる必要がある。

蒲生・上の原遺跡は、丘陵部にある集落跡である。したがって、樹種同定の対象となるものは、炭化した建築部材などに限られる。樹種同定などをおこなう上では、けっして、良好な環境にあるわけではない。ただし、こういう環境下の遺跡が、通常の場合私たちの調査対象となる場合が多いのも事実で、こうした調査機会の多い丘陵部でのデータ蓄積も必要である。こうした観点で、炭化材の樹種同定を委託した。

そこで、その結果を受け、また併せて、樹種同定がおこなわれている他の遺跡のデータについても参考にして、当時の集落景観を復元してみよう。

蒲生・上の原遺跡での樹種同定の結果、炭化材は、コナラ属アカガシ亜属が20点と過半を占め、クリ7点、モチノキ属4点、クスノキ4点、ヤブツバキ3

点であった。これらは、照葉樹林の主要構成要素であるという（第四章参照）。

近隣の集落跡である山鹿市方保田東原遺跡でも樹種同定がおこなわれている（大迫1982）。その結果、野部田式土器の時期の溝や竪穴式住居跡出土の炭化物が、コナラ亜属のクヌギかアベマキ2点、アカガシ亜属の一種2点であることが判明した。落葉広葉樹林と照葉樹林の構成種が2点ずつである。

以上のことを考え併せると、蒲生・上の原遺跡周辺では、広く照葉樹林の森が広がり、一部に落葉広葉樹林のクヌギやアベマキが見られるという景観が想像されるだろう。

県南の八代市下堀切遺跡でも樹種同定がおこなわれている（大迫1989）。環境的には、海岸に近く、蒲生・上の原遺跡のような内陸の遺跡ではないが、大きくは同じ植生を示すだろうと予想される。

时期的には、後期初頭から後期後半までの土器群と共に出土した木材6点が対象となっている。その結果、アカガシ亜属2点、サカキ2点と、ヤマザクラ類、センダン、ハンノキが各1点ずつであることが判明した。

また、花粉分析もおこなわれている（畑中1989）。その結果、Ⅳ層上部からⅢ層下部で、以下のようなデータが出された。それは、優占する樹種には、アカガシ亜属とシイノキ属があること、モミ属やツガ属が高率で認められること、である。

大型種子の同定もおこなわれた（粉川1989）。その結果、「弥生時代後期には近傍にイチイガシ?・シリブカガシ?・クスノキ・ヤマモモ・ホルトノキ・ミミツバイなどの照葉樹林があったものと思われる」という所見がある。

以上のように、県南に位置する八代地方の弥生時代後期の景観は、モミやツガなどの針葉樹林や落葉樹を一部に含んだ照葉樹林が広がることが予想されている。水気の多い土地にある遺跡ということで、採取されたデータは多いが、基本的には、蒲生・上の原遺跡での所見に似た結果であろう。

一方、山間地にある阿蘇町下山西遺跡でも炭化材の樹種同定がおこなわれている（大迫1987）。それは、25号住居跡出土の炭化材61点の分析である。そ

の結果、樹種が特定できたものの内訳は、クヌギ25、コナラ24、ケヤキ2であった。つまり、これらは、落葉広葉樹林に属するものである。標高500m前後という阿蘇谷の特徴的な景観を暗示するデータであろう。

弥生時代の熊本、そこには、寒冷な気候の阿蘇地方と、比較的温暖な平野部があった。そこには、明確な景観の差がある。それを具体的に表すものが、上記してきた結果であろう。つまり、阿蘇地方の落葉広葉樹林と、針葉樹や落葉広葉樹を一部に含んだ平野部の照葉樹林である。それぞれの土地に住んでいた弥生時代の人びとは、まさにそれぞれの土地に広がる森を見て暮らしていたのである。

ただし、これだけではまだまだ資料不足である。もっと多くの樹種のデータと共に、花粉分析や植物珪酸体分析も積極的におこなって、当時の景観復元を試みる必要があろう。そういう契機に、今回の報告がなればいいと考えている。

③弥生時代の食料事情

今回の調査では、炭化した建築部材の他に、炭化した種実も出土した。それは、6号住居跡出土の2点である。当時の食料の一部を表すものであろうし、その同定も委託した。

その結果、イチイガシとモモであることが判明した（第IV章参照）。

当時の食料事情として、こうしたものも食されていたことを具体的に示す事例であり、興味深い。

6. 弥生時代後期の社会と鉄器

蒲生・上の原遺跡では、竪穴式住居跡や濠などの遺構内から鉄製品がわずかではあるが出土した。その器種ごとの内訳は、鉄鏃5点、鉋2点、摘鏃1点、鉄斧2点、不明1点である。出土点数は、11点である。

さて、鉄製品生産の問題として、弥生時代鉄精錬説と鉄素材輸入説とがある。この二つの説は、未だ論争中であり、いずれも定説とはなっていない（金関・佐原編1985）。これは、弥生時代鉄精錬説の決定打となるはずの精錬炉の存在が確認されていないことと係わっているものであり、その意味では、この

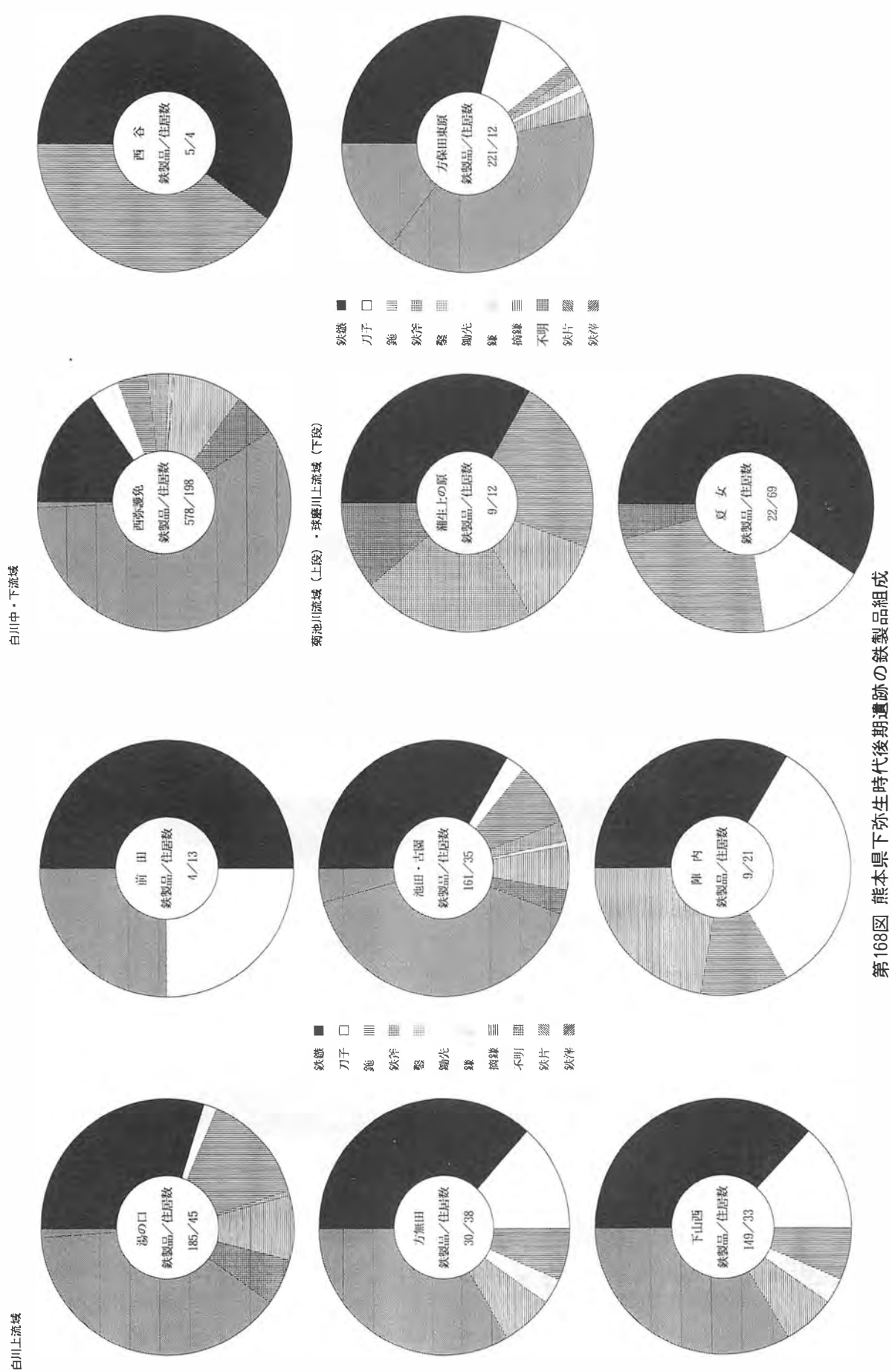
論争がいつ頃決着するのかはまったく分からない。ただし、村上恭通氏も指摘するように、阿蘇地方周辺での「鉄器の量の豊富さ、組成上の地域色」は、「鉄素材生産（鉄精錬）の安定した供給のうえに成立し、地域の生業に根ざした鉄器生産の反映」（1992）とみれるように、弥生時代鉄精錬説を十分に支持させる内容をもっている。そこで、ここでは、そうした立場から、蒲生・上の原遺跡の鉄製品の問題を考えてみたい。

ところで、鉄製品は、生産と消費という側面から見れば、極めて重要な歴史資料の一つである。生産には、当然のごとく、原材採取が可能な地域的限定や、原材から製品用素材へ、そして製品へと進む高度な技術工程が伴う。一方、消費には、需要という側面が色濃いし、生産地からの距離や地形上の隔絶性などの地域的な特性も反映する。つまり、生産と消費との間に介在する流通というシステムは、すぐれて構造的であり、生産地と消費地、生産地内での供給地と需要地、消費地内での供給地と需要地という対応する経済関係が見て取れるだろう。換言すれば、この鉄製品を基にして、その地域の弥生時代社会が浮き彫りにされ、その結果、個別遺跡を地域社会の中に位置付けることが可能となる。そうした意味から、ここでは、広く熊本県内の遺跡を概観して、菊池川流域の地域的特性を認識し、その上で蒲生・上の原遺跡の集落を位置付けることにしよう。

ここでは、白川上流域の6遺跡、白川中下流域の2遺跡、菊池川流域の2遺跡、球磨川上流域の1遺跡を取り上げる（第168図）。

白川上流域では、阿蘇町狩尾遺跡群の湯の口遺跡・方無田遺跡・前田遺跡・池田古園遺跡、阿蘇町下山西遺跡、阿蘇町陣内遺跡を扱う。この地域では、鉄鏃の保有率が高い。また、狩尾遺跡群の湯の口遺跡・方無田遺跡・池田古園遺跡や下山西遺跡では、各種の鉄片や鉄滓などの鉄製品生産に関係する資料が多く出土している。さらに、こうした遺跡では、鉄製品の出土量も比較的多く、しかも器種組成も、鉄鏃・刀子・鉋・鉄斧・鉄鏃・摘鏃を構成要素にして、豊富である。

このように、白川上流域では、集落から出土する



鉄製品の量が多く、豊富な器種組成を示している。生産に係わる資料も多く、鉄製品の生産が各集落で盛んにおこなわれていたことを示しているようだ。生産地内での鉄製品の消費の状況を示していて、興味深い。

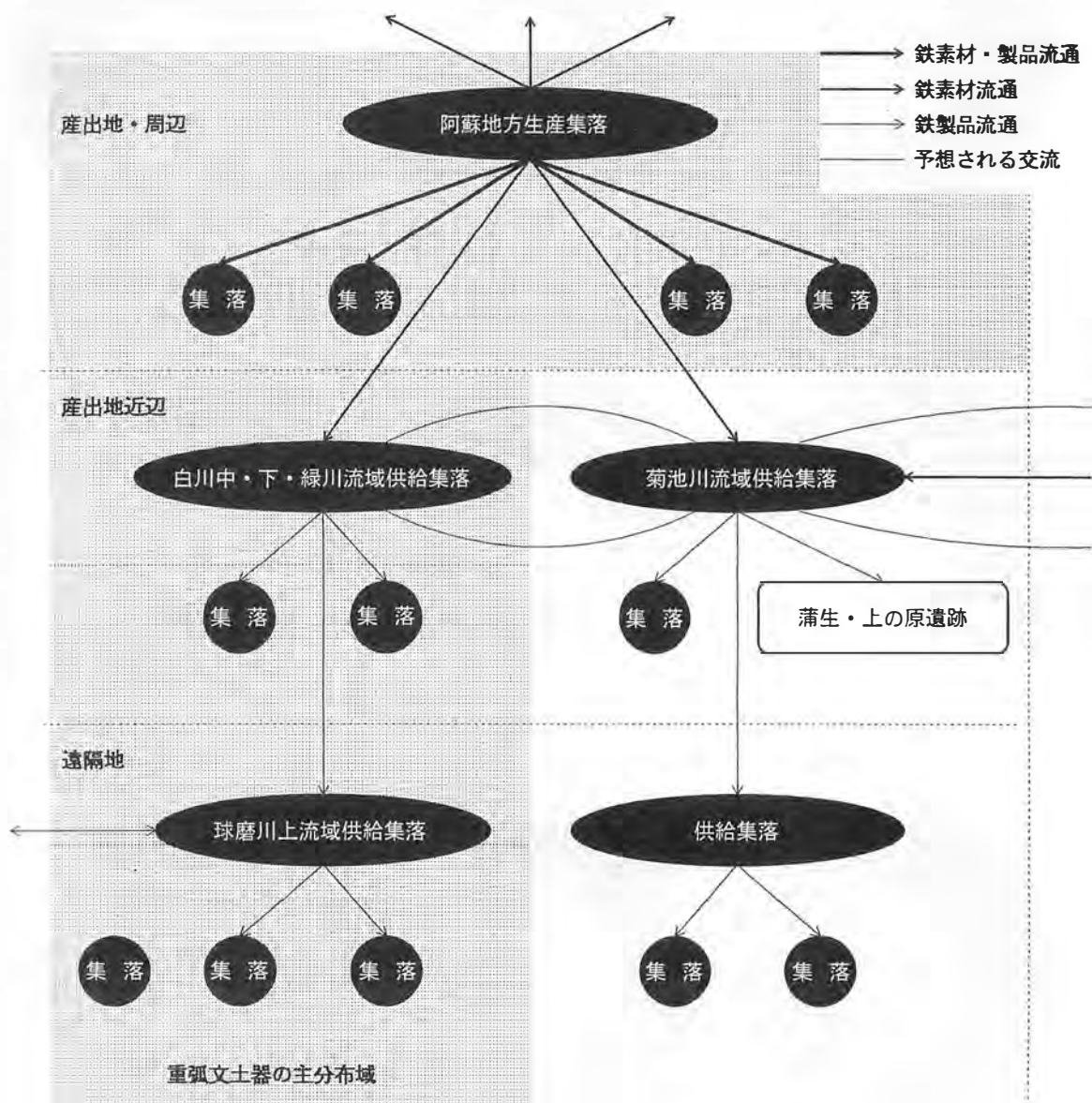
白川中下流域の2遺跡では、大津町西弥護免遺跡と熊本市西谷遺跡を取り上げる。また、具体的なデータは出されていないが、熊本市長嶺遺跡や同市五丁中原遺跡も参考にしよう。

西弥護免遺跡と西谷遺跡との差は、歴然である。例えば、鉄製品出土量や器種組成にその差がよく表れている。また、西弥護免遺跡では、鉄滓が出土し

たり、一つの竪穴式住居跡から多量の鉄片が出土するなど、鉄製品の生産ないし製作がおこなわれていたことが予想される。これに対して、西谷遺跡ではそうした傾向がまったく見出せない。

長嶺遺跡では、多量の鉄製品が出土しているが、鉄製品の生産や製作に係わる鉄滓や鉄片の出土は見られないという。さらに、五丁中原遺跡のように、環濠集落でたくさんの竪穴式住居跡が検出されているが、鉄滓や鉄片を含む鉄製品の出土はほとんどない遺跡も存在している。

以上のように、白川中・下流域では、西弥護免遺跡のような鉄製品の生産ないし製作をおこなってい



第169図 中九州西部の鉄製品流通モデル

る集落、鉄製品の生産・製作をおこなっていないが器種組成が豊富な長嶺遺跡のような集落、鉄製品に係わる資料が乏しい西谷遺跡や五丁中原遺跡のような集落が存在している。これは、生産地から離れた消費地内での鉄製品生産・製作と消費の実態を表しているものと評価できよう。つまり、この地域は、ある程度の形で鉄製品の素材が限られた集落に流通し、そこでその製作がおこなわれ、さらに他の集落に製品が供給されるという特徴なのであろうか。

球磨川流域では、錦町夏女遺跡がある。資料としては、この遺跡のみであるが、この域内には、鉄製品が1点も出土していない山江村大丸・藤ノ迫遺跡があるので、これも参考にしておこう。

夏女遺跡では、鉄鏃・刀子・鉋による単純な器種組成である。それに対して、鉄製品生産・製作に係わる鉄滓や鉄片は、出土していない。竪穴式住居跡の数が69基、道路幅の調査とはいえ、これほどの数の住居跡が確認されているのに、鉄滓や鉄片が1点も出土していないという点は、注意が必要である。また、大丸・藤ノ迫遺跡では、竪穴式住居跡の数が10基と少なくはあるが、1点の鉄製品も出土していないという点は、重要である。

資料不足は否めないが、これが球磨地方の特性なのであろうか。つまり、生産地から遠く離れ、また周囲を九州山地に囲まれた隔絶性という地域的な特性が、こうした特徴を現象しているとも評価できる。つまり、これは、消費地の中で、製品のみが流通するという地域なのかもしれない。

以上のように、熊本県内での弥生時代後期の遺跡では、鉄製品の生産・製作、そして消費という点で、地域的な特徴が見出せる。それは、生産地でもある阿蘇地方での消費のあり方、白川中・下流域における消費地内での鉄製品生産・製作と消費の各種集落類型、さらには隔絶性を帯びる遠隔地の球磨地方という消費地内での消費のあり方である。熊本県下の弥生時代遺跡には、生産と消費、そして流通において、こうした鉄製品に係わる地域的な特性が指摘できるかもしれない。

では、蒲生・上の原遺跡がある菊池川流域ではどうだろうか。

そのことを示すデータとして、蒲生・上の原遺跡と山鹿市方保田東原遺跡をあげる。また、具体的なデータは出されていないが、七城町うてな遺跡と菊水町諏訪原遺跡も参考にしよう。

蒲生・上の原遺跡と方保田東原遺跡との差は、明確である。例えば、蒲生・上の原遺跡で少量の鉄製品が出土したが、1点の鉄滓や鉄片も出土していない。これに対して、方保田東原遺跡では鉄滓や鉄片を含む多量の鉄製品が出土している。諏訪原遺跡がこれと同じような様相である。

方保田東原遺跡や諏訪原遺跡では、鉄製品の生産・製作がおこなわれていたが、蒲生・上の原遺跡ではそうした形跡は認められないということである。つまり、この地域は、白川中・下流域と同じようで、鉄製品の素材が限られた集落に流通し、そこで鉄製品の製作がおこなわれて、他の集落に製品が供給されるというシステムが認められるようである。

蒲生・上の原遺跡は、こうした菊池川流域での鉄製品流通のシステムの中では、もっとも外にある鉄製品消費集落という評価ができようか。それは、おそらく、方保田東原遺跡や諏訪原遺跡という拠点的な集落の外縁を固める集落群の一つであると言えなくもない。そうした位置付けが、鉄製品を通して明らかになってくる(第169図)。

7. おわりに

以上、蒲生・上の原遺跡の調査では、縄文時代早期・後期・晩期、そして弥生時代後期の問題について、下記の視点で考えてきた。

- ① 縄文時代早期土器群の編年学的研究
- ② 縄文時代早期の人びとの生活実態
- ③ 弥生時代後期土器群の編年学的研究
- ④ 弥生時代後期の集落景観
- ⑤ 弥生時代後期の社会と鉄器

これらが、菊池川流域に展開した古い各時代の歴史を知る上での重要な素材となると期待したい。

(註) ここでいう「免田Ⅰ・Ⅱ式」は、乙益重隆氏提唱の「免田Ⅰ・Ⅱ式」に対応していない。夏女遺跡では、乙益氏「Ⅱ式」は出土しておらず、あえて、設定すれば、乙益氏の「Ⅱ式」は免田Ⅲ式として呼ぶべきかもしれない。

文 献 目 録

- | | |
|---------------|---|
| 岩永哲夫 | 1988 「九州東南部における縄文早期遺跡の概観－出土土器を中心にして－」
『宮崎県総合博物館研究紀要』No.13 |
| 緒方 勉 | 1970 「熊本県上益城郡御船町干無田遺跡出土の縄文土器」『九州考古学』
第38号 |
| 緒方 勉 | 1970 「中九州における弥生後期土器について(一)」『熊本史学』第35・36
号 |
| 緒方 勉 | 1972 『宮山遺跡』阿蘇町教育委員会 |
| 緒方 勉 | 1975 「櫛島遺跡」『久保遺跡』所収 熊本県教育委員会 |
| 緒方 勉 | 1992 『瀬田裏遺跡調査報告資料Ⅰ』熊本県大津町教育委員会 |
| 大迫靖雄 | 1982 「方保田東原遺跡出土木炭について」『方保田東原遺跡』熊本県山鹿
市教育委員会 |
| 大迫靖雄 | 1987 「下山西遺跡第25号住居址出土木炭について」『下山西遺跡』熊本県
教育委員会 |
| 大迫靖雄 | 1989 「下堀切遺跡出土木製品について」『下堀切遺跡Ⅱ』熊本県八代市教
育委員会 |
| 大城康雄・廣瀬正照 | 1979 『下南部遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会 |
| 大田幸博・松舟博満 | 1990 『城・馬場遺跡』熊本県教育委員会 |
| 乙益重隆 | 1967 「九州西北部」『日本の考古学』Ⅱ縄文時代 |
| 乙益重隆 | 1968 「中九州地方」『弥生式土器集成本編Ⅰ』 |
| 賀川光夫 | 1967 「九州東南部」『日本の考古学』Ⅱ縄文時代 |
| 鏡山猛・乙益重隆 | 1968 「弥生文化各説－九州」『新版考古学講座』 |
| 金関・佐原眞編 | 1985 『弥生文化の研究』5 道具と技術Ⅰ |
| 蒲原宏行 | 1995 「佐賀平野土器編年概要」 |
| 木崎康弘 | 1995 『無田原遺跡』熊本県教育委員会 |
| 木崎康弘編 | 1993 『狩尾遺跡群』熊本県教育委員会 |
| 木崎康弘・隈昭志・中原由子 | 1986 『大丸・藤ノ迫遺跡』熊本県教育委員会 |
| 木崎康弘・隈昭志 | 1987 『狸谷遺跡』熊本県教育委員会 |
| 清田純一 | 1982 『陣内遺跡』阿蘇町教育委員会 |
| 乗畑光博 | 1991 「南九州における鬼界カルデラ爆発後の遺跡」『南九州縄文通信』No.5 |
| 乗畑光博・上田耕・雨宮瑞生 | 1994 「貝殻円筒形土器と押型文土器の関係－宮崎・鹿児島両県における
出土状況の検討－」『南九州縄文通信』No.7 |
| 小林久雄 | 1934 「所謂楕円捺型文土器に就て」『考古学』第5巻第6号 |
| 小林久雄 | 1939 「九州の縄文土器」『先史学・人類学講座』11 |
| 小林久雄 | 1957 「沈目式土器」『城南町公民館報』第23号 |
| 小林久雄 | 1967 『九州縄文土器の研究』 |
| 小林行雄 | 1938 「南九州地方」『弥生式土器集成図録』 |
| 粉川昭平 | 1989 「下堀切遺跡の大型種子」『下堀切遺跡Ⅱ』熊本県八代市教育委員会 |
| 後藤一重ほか | 1981 「下菅生B式遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡Ⅵ』大分県竹田市教育委 |

員会

- | | | |
|----------------|------|--|
| 佐藤伸二 | 1970 | 「中九州に於ける弥生終末期土器の諸問題」『熊本史学』第35・36号 |
| 坂田和弘 | 1994 | 『深水谷川遺跡』熊本県教育委員会 |
| 坂本嘉弘 | 1995 | 「西日本の押型文土器の展開」『古文化談叢』35 |
| 縄文研究会編 | 1984 | 『九州の押型文土器——地名表・拓影編』 |
| 杉原荘介 | 1943 | 『原史学序論』 |
| 勢田廣行 | 1979 | 「山鹿市方保田白石遺跡出土古式土師器について」『古文化談叢』6 |
| 勢田廣行 | 1980 | 「奄北・高塚遺跡の古式土師器について—熊本県内出土複合口縁壺について—」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』 |
| 園村辰実 | 1993 | 『夏女遺跡』熊本県教育委員会 |
| 田辺哲夫 | 1953 | 「野部田遺跡発掘調査中間報告」『肥後考古学会誌』創刊号 |
| 多々良友博ほか | 1984 | 『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会 |
| 高木正文 | 1977 | 「熊本県の円筒形土器」『考古学論叢』4 |
| 高木正文 | 1979 | 「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』6 |
| 高木正文・江本直 | 1973 | 『尾窪遺跡』熊本県教育委員会 |
| 高田素次 | 1986 | 『しらがね帖』 |
| 高谷和生編 | 1987 | 『下山西遺跡』熊本県教育委員会 |
| 武末純一 | 1982 | 「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 |
| 橋 昌信 | 1984 | 『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学 |
| 橋 昌信 | 1982 | 「無文土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器 1 |
| 鶴嶋俊彦・和田好史 | 1988 | 『村山・閼谷遺跡』人吉市教育委員会 |
| 富田紘一 | 1988 | 「原始・古代」『大津町史』熊本県大津町 |
| 富田紘一・東光彦 | 1969 | 「鹿本郡植木町富応久保遺跡」『熊本博物館館報』1 |
| 中村幸史郎編 | 1982 | 『方保田東原遺跡』山鹿市教育委員会 |
| 西住欣一郎 | 1992 | 『うてな遺跡』熊本県教育委員会 |
| 野田拓治 | 1982 | 「古式古師器の成立と展開—特に中部九州における編年試案」
『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 |
| 畑中健一 | 1989 | 「下堀切遺跡堆積物の花粉分析」『下堀切遺跡Ⅱ』熊本県八代市教育委員会 |
| 古森政次・島津義昭 | 1994 | 『ワクト石遺跡』熊本県教育委員会 |
| 松永幸男 | 1984 | 「押型文土器にみられる様相の変化について」『古文化談叢』第13集 |
| 松村道博・勢田広行・瀬丸敬二 | 1978 | 『中後迫遺跡調査報告書』中後迫遺跡調査団 |
| 松本健郎 | 1974 | 「中九州における古式土師器の新資料」『考古学雑誌』第60巻第3号 |
| 三島 格 | 1965 | 「原始」『城南町史』熊本県城南町 |
| 宮坂孝宏 | 1993 | 『白鳥平A遺跡』熊本県教育委員会 |
| 宮坂孝宏 | 1994 | 『白鳥平B遺跡』熊本県教育委員会 |
| 村上恭通 | 1992 | 「中九州における弥生時代鉄器の地域性」『考古学雑誌』第77巻第3号 |
| 安田喜憲 | 1980 | 『環境考古学事始 日本列島の二万年』 |

安田喜憲	1982 「気候変動」『縄文文化の研究』1 縄文人とその環境
柳田康雄	1987 「高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ
柳田康雄	1991 「土師器の研究 九州」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器
山崎純男・小畑弘己	1983 『柏原遺跡群Ⅰ』福岡市教育委員会
山崎純男・平川祐介	1986 「九州の押型文土器」『考古学ジャーナル』第267号
山田康弘他	1995 『高畑赤立遺跡』熊本大学考古学研究室
米倉秀紀	1983 「縄文時代早期の生業と集団活動」『文学部論叢』第13号 熊本大学